幼兒の教育

第三十六卷　一月號　第一號

東京女子高等師範學校內
日本幼稚園協會

廣島文理科大學內

應用心理研究會編

菊判洋綴紙數五百五十頁
定價金三圓・送料廿二錢

好評

應用心理研究

第二卷

目次概要

驟音の作業能率に及ぼす影響に就いて　醫學士　松本洋
工場作業能の標式　醫學士　高峰博
齢兒八ヶ年間の智能發育と學業及び身體との關係　文學博士　久保良英
洞察に關する實驗的研究　文學士　上野陽一
人は利益なしに働くか　文學士　古賀行義
筬技に對する意見の評定　文學博士　松本亦太郎
藝術に表現された女の幽靈　文學博士　岡部彌太郎
工人の性格檢査實施法　文學士　戸部行男
記憶檢査による精神的障碍の觀察　文學士　布留武郎
森田神經質說の行動主義契機に就て　文學士　古閑義之
氣質・性格の研究　文學士　加藤春雄
新心理主義文學覺書　文學士　寮金吉
歐米の應用心理學概觀　文學士　桐原葆見
裁縫教授の研究　文學士　松本順之

東京高等師範學校教授
文學博士
小野島右左雄著

最近心理學概說

菊判全一冊洋綴　定價五圓八十錢　送料三錢

學者は本書に依つて斯學の一體系を知るに止まらず、成立と新しき斯學の歸趨を示し、受教育者の心的體制の理解と教育者の心的體制とを受け、生徒の人間の數だけ、生活論理學の方法を教へられ、教育者の新方法は一般人間の最も即事的な論理と應用を示され、斯くてこそ心理學は科學の先陣に立ち此思想國難の打開に資する。

性格心理學と兒童研究

菊判全一冊洋綴　定價二圓七十錢　送料廿二錢

兒童研究、性格心理學に主點を置き各種の新研究を發表し、猶最近心理學の動向を檢討して最も斬新なる斯學上の諸問題を提出し之等に對し教授團自の立場を展開してその進展に寄與すされば一般心理徒學及び教育家篤學者の御必讀を乞ふ。

心理學要論

菊判全一冊洋綴　定價二圓　送料廿二錢

現代の科學的心理學は一般理論と一つの單なる體系の中に纖り成し、舊來の陳腐なる心理學の敍述を脫して現代將來の人間の動向を正確なる科學の下に、心理學の要論である。

本書は心理學の形式を、論ずるに、始終一貫して、人間の所產を、主張し、猶ほ常に豐富なる暗示を與へてある。

發行所　東京市牛込區天神町一四七　中文館書店
振替東京三八四二
電話牛込三三二五七番

賀正

昭和十一年元旦

日本幼稚園協會

童話童謠募集

昨年童話童謠の募集を致しました時は優秀の作品を多數御應募下され有難う存じました。本年も續いて同樣御作品を募り度く、左記の通り御承知の上、多數御送稿下さいませ。

募集規定

一　應募作は幼兒童話、幼兒童謠であること、內容は任意なれ共成る可く春向の題材のこと、但し在來のものの改作はお受けしませぬ。必ず創作のこと（舊作にてもよろし）

一　應募篇數任意

一　原稿用紙にペン書のこと（插繪、カット等入れるも可）尙、原稿は一切返却せず

一　應募者は宿所氏名（誌上匿名隨意）、奉職園（校）名明記のこと

一　宛名　日本幼稚園協會童話童謠研究部

一　締切　昭和十一年三月十五日

一　選　本協會童話童謠研究部委員

入選作若干は本誌に掲載の上帶留或はピンを賞品として贈呈致します

尙御不明の點は往復はがきにて本協會にお問合せ下さい

保姆生徒募集

一、募集人員　五十名

一、出願期限　二月一日ヨリ受付

規則及入學案内ハ二錢切手ヲ同封シテ請求セラルヽカ又ハ山手線目白驛前目白幼稚園ニ就キ承合セラレタシ

淀橋區下落合三丁目一、三八八

東京目白保姆學校

電話落合長崎　五五九番

生徒募集

本科生　四十名

研究科生　若干名

願書受付　昭和十年十二月一日ヨリ
　　昭和十一年三月二十日迄

規則書は貳錢切手封入の上申込まれよ。

創立以來二十一年。
大正五年東京市麴町區に創立。
昭和二年武藏野の中なる現在地に新築、附近に森あり、野あり、川ありて四時自然の恩惠を受け、本校の特色とする自然觀察、博物採集、圖畫寫生、自然物應用の手工等材料豐富なり。

玉成保姆養成所

所長　ソフアヤ・アラベラ・アルウ井ン

東京市杉並區西高井戸一丁目一三三

省線西荻窪下車直南約五丁

生徒募集

△本科　四十名

△聽講生　若干名

願書受付　三月二十五日マデ

△特色

一、佛教各宗ノ公共的共同事業

一、設備並環境良シ學資低廉

規則書請求二錢切手封入申込マレタシ

東京市中野區宮前町四八番地

佛教保育協會保姆養成所

電話中野五八七〇番

生徒募集

一本科　七十名

一研究科　若干名

右募集ス

出願期限　二月一日ヨリ三月廿五日迄

規則書入用ノ方ハ二錢切手封入申込マルベシ

授業時間	自午後一時
	至午後五時

東京市品川區大井原町五二〇八

東京昭和保姆養成所

所長　土川五郎

顧問兼講師　倉橋惣三

生徒募集

東京府知事認可

貞靜學園保姆養成所

一、生徒定員　四拾名

一、入學資格　高女卒修業年限一ケ年
無試驗にて免許狀下付さる

◉本養成所特點

1、教育方針
畏くも皇室中心主義にして人物養成を主眼とし主婦とし母としての準備教育を施すを以て目的となす

2、附屬幼稚園あり
理想的附屬幼稚園ありて養成所生徒の實習に便ならしむ

3、教職員
有資格者にして斯道に經驗ある優秀なる權威者揃ひ

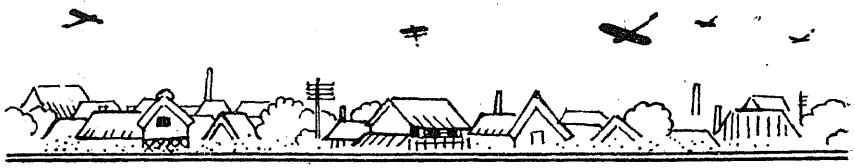
◉就職率　勿驚　一〇〇パーセント
二十五人中　市內十五人　地方七人　南洋二人　支那一人

申込期限　自昭和十一年一月八日　至同年四月二日

規則書郵券二錢要す

東京市小石川區大塚町六九
電話大塚(86)六七二〇
電停大塚窪町

學園長　高橋滿喜



第三十六卷　幼兒の教育　第一號

——(次　目)——

口絵

卷頭(正　月)……倉橋惣三…(一)

明治維新前後に於ける我國兒童教育の狀況……乙竹岩造…(二)

子供の繪(其三)……菅原教造…(二六)

幼兒の宗教教育……霜田靜志…(四二)

幼兒をよき環境に憩はしめよ……砥上種樹…(四九)

兒童心理學文獻抄(十四)……牛島義友…(五二)

幼年童話　踏切ごっこ……武田雪夫…(五七)

素人に出來る木工の話(三)……山形　寛…(六一)

お角力あそび……及川ふみ…(七〇)

上澤謙二先生編著

四六判美裝
函入四三〇頁

新幼兒ばなし三百六十五日

—毎日取扱方說明つき

（冬の巻）新刊

☆全四巻

春の巻〈既刊〉
秋の巻〈既刊〉
冬の巻〈新刊〉
夏の巻〈近刊〉

定價各冊二圓二十錢
送料各冊十四錢

幼稚園に、學校に、各家庭に！

毎日聽かせて飽きさせぬ凡る話の寶庫！

然も一つ一つ日々の話の目的と取扱方を附しお話の原理を明かにすると共にお話による幼兒教育の理論と實際を說述す！！

＊此の書の中には幼兒ばなしの凡ゆる種類が網羅されてゐます。自然ばなし、寓話、譬喩、教訓ばなし、祝祭日ばなし、人物ばなし、歷史ばなし、藝術的なおはなし、笑ひばなし、ナンセンスストオリイ、なぜさうばなし、動植物愛のはなし、等。—殊に科學ばなし、觀察ばなし、算數ばなし、感覺練習ばなし、生活ばなし等は著者創意の新しいスタイルで書かれてゐます。

☆細心の注意と此の新しい工夫を見よ！

1—新しい兒童觀、新しい教育思想、新しい社會狀勢の下にあつて、新しいお話が要求されることは寧ろ當然であります。本書は此要求に應じて生れた新しい幼兒ばなしの系統的な良心的な唯一のものです。

2—幼兒の觀察訓練、數の觀念、機械に對する親しみ等により、幼兒に新しき社會生活の基礎を据ゑること、我國祝祭日獨特の社會行事の鮮明と生活化により國民教育の前提を作ること、人類愛動植物愛、自然に對する愛等、汎く愛の精神を幼兒に植ゑ附ること等本書に於ては實に細心の注意と工夫が拂はれてゐます。

實物提示による幼兒に聽かせる話	久連松弘先生著	價二・三〇送・一二
幼稚園ばなし	長尾豐先生著	價一・八〇送・一四
幼稚園低學年 おゆうぎ	長尾豐先生著	價一・〇〇送・一〇
幼稚園低學年 おはなし	長尾豐先生著	價一・五〇送・一〇
子供の遊ばせ方	坂內ミツ著	價一・〇〇送・一四
幼稚園低學年の生活圖畫指導	三森連象先生著	價二・六〇送・一四
幼稚園の舞踊	石井小浪先生著	價〇・八〇送〇・八
幼稚園教育の實際	永澤義憲先生著	價一・八〇送・一四

東京・麴町・下六番町
振替東京五九六〇〇番
厚生閣刊行

かろやかに
あかるく

附屬幼稚園

幼兒の教育

昭和十一年一月

正月

日本中の子ごもが、揃つて、一齊に、一つ宛大きくなつたと思ふと、心の底からほゝ笑ましくなる。

正月は、誰れにも齢を一つ宛持つて來て呉れたのであるが、子ごもら程、それを喜び受けたものはあるまい。あの可愛いゝ指で、自分の新らしい齢を數へてゐる。あの可愛いゝ口で、自分の新らしい齢を誇つてゐる。しかも、正月が公平に分けて呉れた齢の中でも、子ごもらの分は黄金の特製で、ごれもこれも一つとして輝かしい光りに輝き光つてゐないのはない。

それにしても、日本中の子ごもが貰つた、その輝しい齢の總數は幾つになることか。盛つても盛つても盛り切れない、その盛んな數を思ふ時、亦一段と嬉しくなる。

誠に、なんといふ、いゝ正月なのであらう。

（倉橋惣三）

明治維新前後に於ける我國兒童教育の狀況

——日本幼稚園協會講演會に於ける講演速記——

文學博士　乙竹岩造

私は只今御紹介頂きました乙竹であります。今年は我國で幼稚園が開設せられましてから丁度六十年になる思ひ出の多い年に當ります。この協會のお集りの席上で、六十年以前の頃に於ける子供の教育の有樣に就てお話申上げよ、この御依頼でございまして、……丁度、明治維新前後の二、三十年間に當ると思ふのでありますが、其頃は今日の樣に「幼兒」とか「兒童」とか云ふ概念がはつきり區別せられて居らなかつた頃でありますから、幼兒の教育と云ふ事だけを取出して申上げる事は頗る困難でもありまするし、旁々もちまして兒童教育一般の有樣に就て申上げると云ふ事に致しておいた次第であります。

此頃の子供の教育は、家庭、それから社會、それ以外に於きましては、主として寺子屋で行つたのであります。武士(さむらい)の子供も藩の學校に這入ります迄は矢張、寺子屋に參りました。又藩とか或は幕府直轄の土地で、幼學寮といつたやうな名

で兒童の教育所を設けた處もありますが、其處で行はれた教育の內容は、寺子屋のそれと全く同じであります。其故に寺子屋と云ふものは先づ此頃の子供の教育所であつたと申して宜いのであります。

所で寺子屋と云ふものは明治維新と同時に無くなつた樣に考へられる向きもありますが、さうではありません。寺子屋と云ふものは數の上から申しますと、明治以後に於て一番多くあつたのであります。で、一寸思ひを其頃に馳せて頂かなければならないのでありますが、德川時代、幕府の末期に於きましては、我國は內外誠に多事であり、天下が騷然と云ふ樣な狀態で、今日の言葉で言へば、全く非常時でありまして、人心恟々たる有樣であつたのでありますが、その狀態が當時の國民の心持を非常に引緊めまして、子供の教育の必要、と云ふ事を甚だ强く自覺せしめました爲、寺子屋と云ふものが全國津々浦々にまで普及するに至つたのであります。明治五年になりまして御承知の樣に「學制」が發布せられまして、その學制による小學校が澤山出來たのでありますけれども、その小學校と云ふものは都鄙を通じて、この寺子屋がその基礎となり地盤となつて居るのであります。斯樣な譯でこの明治維新前後二、三十年間の頃は寺子屋と云ふものは全國都鄙遍ねく普及致して居つたのであります。これから申上げるお話の中に略して其頃と申上げるのは、この明治維新前後二、三十年間の頃と御承知を願ひ度いのであります。

此頃の子供が一體どの位就學したか、寺子屋に行つたかと申しますと、それは地方によつて隨分色々であります。この東京の前身たる江戸だの、大阪だの、京都だの、名古屋だのと申す大都會に於きましては、先づ今日の學齡兒童に當る子供の尠くとも六、七割は學に就いたのであります。併し山奧とか漁村とか云ふ處に參りますと、學に就いた者が甚だ少いのであります。で、大體全國をおしなべて申しますと、全國の多くの處は、是等の兩極端の中間に位して居つたと、大體

申上げておくことが出來ませう。

子供の入學は、その時期も年齢も、地方により又家庭によりまして、區々でありますが、江戸等では六才即ち數へ年の六つになつた年の二月、初午の日に入學した者が相當に多かつたのであります。「東都歳事記」に云ふ年中行事を書いた書物がありますが、その書物の「二月初午」の所に「此日小兒の師匠へ入門せしむる者多し」と書いてありまして、そこに「いの字より習ひ初めてや稲荷山」と云ふ句が擧げてあります。初めて寺子屋に入つて「いろは」の「い」の字から習ふのでありますから、「いの字より習ひ初めてや」、初午の日でありますから「稲荷山」と云ふのでありまして、さう云ふ句が載つて居ります。一體この六歳から手習を始めると云ふことは、貝原益軒の「和俗童子訓」にも定めてある處でありますが、正月はまあ遊ぶ月でありますから、それが過ぎて二月の初午と云ふ事になつたのでありませう。農村等ですと、子供を寺子屋にやると云ふ事は、農業の繁閑—即ち忙しい時と閑な時—とかに甚だ密接な關係がありますので、秋の穫入れが濟んで了ふ頃迄は、非常に農家は忙しいものですから、子供を學校へやると云ふ樣な事は、却々手が其處迄廻らない。冬になつて閑になると、子供の手習のことをも考へる。それで夜學なども多く冬期に行はれるのも、この關係からでありませう。然し子供が小さくては無理ですから、通學其他の關係もあつて、翌年即ち七つになつてやるか、八つになつてからやると云ふ樣な事も多多あるのでありますが、都合の付く家では、六つの初めからやる事になつたのでありませう。最も江戸等では六つの年の六月六日、即ち六の付く年の月の日に、寺子屋にやり始めた樣な事も隨分多いのでありますが、これは六と云ふ字を餘まりにも重んじ過ぎた所から起つたのでせう。又在學の年限も、色々ありまして、統計的に見ますと、男の子供に於きましても、女の子供に於きましても、まあ三ケ年行つた者が一番多かつたのであります。

所で寺小屋と一概に申しましても、その規模に至つては實に色々ありました。大都會にあつた大きな寺小屋ですと、三百人も四百人も、時としてはそれ以上もの在籍兒童數を有つたものもありました。先生の方でも、御主人も奥さんも、息子も娘もと言つた樣に、一家擧つて子供の世話に當り、その上長くその寺子屋に在學した上に、自分も將來は學校を開かう、卽ち師匠にならうと云ふ樣な者が、助敎としてこれを助けるから、總勢七、八人の先生の居た處もあります。その建物の如きも、其頃には極く珍らしいものでありますが、三階建のものも、稀れにはあり、二階建が――東京等で申しますと――先づ普通であつたと申してもよい位澤山ございました。二階建の處では、大抵、下から上へ上る段梯子の中程の處に中二階と云ふ所が設けてありまして、其處が師匠の居る場所になつて居たのであります。茲からは、仰ぐと二階が見え、俯くと階下が見える。最も茲からは、二階の極く奥迄は見えませんが、子供から申しますと、先生の顏だけは見えるのです。これに就て面白い話があります。嘗て師匠が、下の方の部屋で子供が机の上で紙を出して人形の樣なものを拵へて悪戯をして居る者を見付けたので「不可ない」と言つて叱つた。所が上の方の部屋で机の上で人形を出して遊んで居た子供が、自分が叱られたのだと思つて直ぐに人形を机の下に隱した―机の下を椽の下と申して居たのですが―その椽の下に隱した。隱した爲に先生からよく見えて、それで叱られた、と云ふ樣な挿話があるのであります。で大抵二階の處ですと、下が男の子供の席、上が女の子供の席になつて居りました。これは、男の子供は、先生が居りませぬ時などは、相撲等をとるのでありますから、當時の家では家が持たない。その上、上で騷がれると、下が喧くつて困る。それで上を女の子供の席、下を男の子供の席にした所が多かつたのであります。一階の處では、男の子供の居る席と、女の子供の居る席と、二つに分けて居ります。之を通例、男座、女座と呼んで居ました。

で、建物は大抵その四方八方に窗若しくは戸が立つて居るのであります。これは江戸の話でありますが、古くからも江

戸の雨は横に降るなどと言ひまして、吹降が多いのです。それで北の方から雨が吹込む時は南の窓を開ける、東の方から吹込む時は西の方を開けると云ふ風にして、光を採る樣にしませぬと、雨降の日等は何うしても光の關係上、子供が勉强する事も、遊ぶ事も出來ないのであります。雨天の日と云ふものは色々の點から寺子屋が非常に困つた事でありますが、それは後に申上げます。

建物が普通の家よりは大きい家を用ひたと云ふ事に就ては、斯う云ふ事實があります。ある休日に、五、六人の醉客が、料理屋と間違へて寺子屋へ這入つた。直ぐ二階へ上つて見ると、その部屋の一方に机が澤山積み重ねてあるので、初めて寺子屋だと氣が付いて、深く詫びて、這々の體で逃げて行つたと云ふ話がありますが、それは、寺子屋が普通の民家よりは大きな家であつたことを物語るものであります。尤もこれは大きな寺子屋の話でありまして、小さいものになりますと、僅かに六七人乃至十人内外の子供より持つて居なかつた樣なのも澤山あつたのであります。さう云ふ寺子屋は概ね路地にあつた。大通から這入つた横丁、廻りくねつた處の路地等にあつたのであります。川柳に「手習子、蜂の如くに路地から出」と云ふのがあるのでありますが、丁度七ツ下り八ツ下りなどゝ申して、今日の午後二時三時頃の退散時になると、五人も七人もの子供が、丁度蜂が巣から飛立つ樣に我先に飛出して來る有樣を詠んだものでありまして、小さな寺子屋が路地に澤山あつた事を象徴して居ます。

地方でも矢張り其通りでありまして、お寺の庫裏とかお社の神主の社宅とか、庄屋肝煎、其他村役等の家とか、比較的廣い建物が師匠たる僧侶・神官・村役等によつて寺子屋として使はれたのが多いのです。專業として開業せられた場合でも、比較的大きな民屋が、それに使はれて居ます。私の鄕里でも、昔寺子屋であつた家が私が子供の頃に、寄席に使はれて居つたのを記憶致して居ります。併しこれは都會地の情況でありまして、村落の方に參りますと、師匠が五、六人の子

供を集めて手本を書いてやつて、それを習はせておいて、自分は鋤や鍬を擔いで田畑に出掛けて行く。夕方歸つて來てから、子供の手習を見てやるとか、淸書を直してやるとか云ふことをする。子供が分らぬ所があると、先生が耕作して居る野良まで走つて行つて聽くといつたのや、或は又冬の農閑期三ヶ月間位開く寺子屋も澤山ありまして、私共はこれを簡易型の寺子屋と申して居るのであります。

斯樣に規模は實に色々ありましたが、その數は非常に多かつたのであります。この數が非常に多かつたと云ふ事が、實に非常に好都合のことであつたのであります。と云ふのは、子供の就學と云ふ事は、父兄の熱心ばかりでは行かない。當時の樣に交通の非常に不便な時代に於きましては、近い處に寺子屋があると云ふ事が、子供の就學に大きな影響をもつてゐた條件でありました。今日の樣に、交通が充分に開けた時代に於きましては、就學兒童の數が殖えるに拘らず、小學校の數は寧ろ減る傾きがあります。それは、設備の不完全な學校をば、完全な學校に合併するからでありまして、その最も著しい實例は、アメリカのコンソリデーション・スクールであります。大勢の子供を、自動車で一擧に運びますから、通學距離の遠い事が、餘り問題に成らないのです。所が、交通の至つて不便な當時に於きましては、これとは事情が正反對で、近い處に寺子屋が有るか無いかといふ事が、就學に非常な關係を有ち、澤山有つて、隨つて近所に寺子屋があるといふことは、最も都合が好かつたのであります。尤も、子供の模樣も今日と全く違つて居りまして、靴を履いて學校に行くなんて事は絶對にございません。大抵草履ばきですし、砂地の地方等では、天氣の日は概ね跣足で通つたものです。跣足で行つても、一寸拂つて上るのでさまで不潔でもなかつたのです。無論寺子屋も疊を敷いてあるのは極く僅かでありまして、板間の上に莚又は蓆を敷いたのが大多數であつたのであります。

そして今も申上げた樣に、男女を分けて座席を設けたのでありまして、一方は男座、一方を女座と申して居りました。

川柳に「師匠さん以上と、かしく分けておき」と云ふ句があります。此の時分は男の書く手紙は……候以上と書き、女の手紙は、……候かしく、と書いたものであります。それで「以上とかしく分けておき」と云ふのは、「以上」と書く男の子と「かしく」と書く女の子を別けて置くと云ふ事を歌つたものでありますが、これは、かの「男女七歳にして席を同じうせず」と云ふ事が、文字通り徹底的に守られて居つた當時の社會に於きましては、男の子も女の子も同じ寺子屋へ行つたと云ふ事が、當時としては實に破天荒の事であつたのであります。男女席を同じうせずが、强い風習の一つの原理を爲して居た當時に於て、男と女とが同じ處に集つたと云ふ事は、寺子屋と心學の講座とだけです。そして心學の講座では、男と女との座席の間に簾を立てゝ互に見えない樣にして、そして講釋したものでありますが、寺子屋は男座と女座を分けただけで簾も何もそんなものは立てずに學ばせたものであります。

次に子供の課業の模樣でありますが、無論習字が主なものでありました。これは御承知の通りであります。そして、手本を書いて子供に渡すと云ふ事が、先生の第一の仕事であつたのであります。で數人の助教を持つた大きな寺子屋は勿論、子供には習字をさせておいて、師匠は鋤鍬を肩に田畑に出掛けた簡易型の寺子屋に至るまで、一つの取除けなく、手本だけは、先生が書いて子供に渡したものであります。そして子供はその手本を模倣して反復練習する。これが、全體を通じて凡ゆる寺子屋に共通な子供の主な仕事であつたのであります。文字の大いさも、一度に習ふ字數も、手本がこれを示して居るのでありまして、初めは大抵一枚に四字です。それから六字、それから八字、それから十字以上と、段々多くなつて行くのでありまして、之を「四折」「六折」「八折」「十折」と云ふ名稱で呼んで居ました。今日の教程に當りませう。草紙は隨分澤山習ふのでありまして、中には二十枚位綴つた草紙を五冊位持つて居る者が居ました。無論習ふと申しましても、子

供のことですから、大體はぬたくつたのです。そして一册習つて了ひますと、その草紙を乾かす。多く軒端や庭に繩を張り渡して、その繩に吊して、それを乾かす。その乾く間と云ふものが、子供には休憩時間でありました。ですから、雨の降る日は困るんです。乾しても乾きませんし、第一繩を吊る事が出來ません。とにかく子供の遊ぶ時間が長くなりますから、子供は大喜びですが、先生の方では、その管理に骨が折れたのであります。それで、さう云ふ時には讀書を多く教へたものです。草紙は、斯やうに習つては乾かし、習つては乾かしますから、眞黑けで、黑光りに光つて居ます。私の手許にも、その實物が若干ありますが、今日は餘り時間を多くとつてもと思つて持つて參りませんでした。又その筆は、その毛が摺り切れて先が丸くなつてゐる程でした。當時の章謠の中に、「てん〳〵寺子、何々習ふた。瑠璃の草紙に禿筆」といふのがあります。青黑く光つてゐるから、「瑠璃の草紙」、又先が丸くなつてゐるから「禿筆」と言つたのです。それ程でありますから、子供は手と言はず足と言はず、隨分黑く墨をつけて居たやうです。川柳に「看板に僞のない手習子」と云ふのがありますが、成程これは皮肉な寫實でありませう。勤勉な教師は、子供の習つて居る間に机の間を廻つて歩いて、子供の後から手を取つて筆法を教へるのであります。又大きな處では兄弟子と呼ばれる上級生が、手を取つて教へてやつた處も隨分多いのであります。斯くて四、五日目に清書をします。清書は元來「きよがき」と讀みまして、その起りは手習と一緒であり、無論寺子屋自身よりは餘程古いのであります。子供が手習をすると云ふ事は、寺子屋よりは古いことでありまして、ずつと昔から、上流社會の家庭に於ては、子供が一定の年齡に達すると、手習をさせたのでありまして、平安朝の頃の物語類にも見えてゐますし、正月に書初をしたと云ふ事は「東鑑」にも二三ヶ所載つて居ます。それから後ずつと傳つて居た風習ですが、然しその清書の批正に色々と奬勵の仕方の、賑やかな內容を持つて來たと云ふ事は、之は寺子屋に於て盛に行はれた所のものであります。その方法は、一方には、字の下手な所を直してやるのであります。川柳の中に「師匠樣一日釘をな

ほしてる」だの「金釘を師匠眞赤に燒直し」だのいふのがありますのは、これを皮肉に詠んだものでせう。これと同時に、他方には出來の良い文字に色々の評點、評語を與へるのです。それにも色々ございまして、例へば評點には、點を一つとか二つとか三つとか四つとか、それから半丸、丸、二重丸、三重丸等を付けたのが、多うございます。評語には天・地・人、松・竹・梅、吉・上吉・大吉、佳・佳々・大佳、それから美事に候・一段美事に候・追々上達美事に候、なぞ段々と文言を多くしたのや、又最も秀逸な作品に對しては、大極上だの無類飛切だの、或は鳳姿龍章とか傍華隨柳とかの、美辭麗句を付けたのもございます。

次に讀書でありますが、讀方は、手本の文字の讀方がその出發點であります。少し進みますと、その方法は大抵、師匠の前に子供を集めまして、師匠が字突棒、これは大概竹で拵へたもので、文字を指示す棒ですが、これで一字づゝ指して、先づ先生が一句讀むと、子供達が一齊にそれを眞似て讀むのです。手本以外の教科書としては、「實語教」とか「童子教」とかゞ、多く使はれて居ますが、その「實語教」で言ひますと、師匠「山高きが故に尊からず」兒童「山高きが故に尊からず」師匠「木あるを以て尊うしとなす」兒童「木あるを以て尊うしと爲す」師匠「人肥えたるが故に尊からず」兒童「人肥えたるが故に尊からず」師匠「智あるを以て尊うしと爲す」兒童「智あるを以て尊うしと爲す」といつた工合に進むのです。そこに往々一種の讀み癖が出來てゐます。一體讀み癖と云ふものは、ゆつくり調子を合せて讀む所から生ずる自然の副產物でありまして、それを支配するものは、範讀者たる先生の讀み口調です。只今讀みました中に「たつたうからず」とか「たつとうしとなす」とか、强く抑へて讀むなども、多くの師匠にあつた所ですから、具體的に申上げて見たのです。それで、讀書は、斯やうに素讀だけでありまして解釋と云ふ事はしなかつたのです。これは寺子屋ばかりではなく、一般に當時の學校では、素讀

と解釋とを全然別の仕事の樣に考へて居つたのでありまして、講釋をした場合でも、素讀はずうと上迄行つてゐても、解釋は低い書物をやると云ふやうな事でした。先づ讀んで〳〵、意味が自ら解る樣にする。所謂「讀書百遍意自ら通ず」るやうにしようとしたものであります。それですから、一種の意味に於ての「論語讀みの論語知らず」も出來た譯でありませう。その代り、實語教の本文などは、全部暗誦してゐる故老なども隨分あります。

今日の修身に當るものとしては、「お談義」と云ふものがございました。之は主として忠臣孝子節婦義僕等の事實を說き聞かし、その外、法度、掟類を知らせ、又日常の心得をも教へたのであります。當時は都會の地には自身番と云ふものがございまして、篤行者等が、旌表せられる都度、その事由が、この自身番に掲示せられたのですがそれが寺子屋の教師には、お談義の切實なる教材を提供したものであります。子供達は寺子屋で師匠からその話を聞いて、歸りには自身番の掲示を讀む、と云ふ樣な譯で、寺子屋の教育と社會の教化とが、おのづから連結される樣になつて居つたのであります。

算術は、都會の寺子屋では隨分教へた處がありますが、田舍の寺子屋では殆ど教へなかつた所も多いのです。都會でも色々ありまして、例へば大阪等は存外澤山算術を教へて居ります。尤も之は、算盤屋と云ふ別の設備がありまして、其處で多く教へたのでありますが、江戸等では男の子供には若干教へましたけれども、女の子供には、算盤の珠を彈くと、大きくなつて主人を彈き出す、などゝ埒もない迷信に拘つて、教へなかつた所もあります。然しそれは大分前のことで、明治維新前後の頃になりますと、算術を教へた所が著しく多くなつて來てゐます。その教材は先づ第一が九九です。主に九九の暗誦、それから八算、卽ち加減乘除から諸等數まで位ですが、その邊まで進んだ所があります。

男の子供が多く算盤を習つたのに對して、女の子供には裁縫が課せられました。そしてそれは、主として師匠の妻の仕事であつたやうであります。地理だの歷史などは、大きくなつた子供だけが習つたのでありまして、その習ふ方法は、讀

書によつてこれを習得したのであります。

今日の試驗に當るものと致しましては、さらへと云ふものがあつたのです。このさらへに大さらへと小さらへとがありまして、先づ今日の學期試驗と學年試驗とに相當しませうか。さらへの時には、師匠の方で本や手本を取上げて了ふのです。さうしておいて、そらで文字を書かせるとか、讀ませるとかしたのです。これは子供達には最も苦痛であつたと見え、當時の童謠に、「大ざらへ小ざらへ手本さられて泣ざらへ」と云ふのがあります。子供の氣持を最もよく現はしてゐます。

以上は寺子屋の學習生活でありますが、併し寺子屋の學習生活は、何といつても單調なものであり、殊に幼稚な子供には、長い間じつと座つて居ると云ふ事それが、非常に窮屈を感ぜしめたのであります。でまあ、師匠の妻等の行屆いた世話と、同じく通つて居る兄や姉の手助けとによつて、辛うじてその通學が續けられたのであります。唯だこの單調を破り、この窮屈を救つて、樂しい變化と新しい活氣とを彼等の上に齎らしたものは、寺子屋で行はれた樣々の行事であります。その行事は大體に於て二類に分れると思ひますが、第一の方は、節句等のお祝お祭であります。先づ正月の書初を始めとして、二月の初午、三月上巳、五月端午、七月七夕、八月盂蘭盆等は、家々でもお祝やお祭をしたのでありますが、之と正さに相應じて寺子屋にも行事がございました。斯うした日には、晴着を着せて子供を寺子屋にやる事は、親としても、無上の悅びでもあり樂しみでもあつたのでせう。子供は大抵晴着を着て寺子屋へ來る。寺子屋でも簡素な設けを致しまして、彼等一同を迎へてお祝を致します。斯くて彼等は寺子屋で遊んで後、又巷で遊ぶので　獨樂を廻したり、紙鳶を揚げたり、竹馬に乘つたり鬼ごつこをしたり、不斷寺子屋では禁ぜられて居た事も、この日ばかりは許されて、そこで思ひの儘に遊ぶ。斯くて寺子屋も家庭も又村や町の巷も、全く賑やかな子供の世界を現出したのです。一つは時候の關係もあつ

たでせうが、殊に七夕と盆とは、地方によりましては隨分盛な行事が行はれたものであります。その有樣は、畫家(えかき)等によつて描き出されて、古い風俗畫等には、寺子屋の七夕や盆の賑やかな情景が載つて居ります。第二種は寺子屋特有の行事でありまして、席書、天神講・文珠講等であります。席書と云ふものは元來、書家の會合から起つたものでありますが、寺子屋では、丁度今日の學藝會と、成績品展覽會とを兼ねたものとして行はれたのであります。大抵一年に二度行つた處が多い。この日は寺子屋を綺麗に飾りまして、毛氈なぞをも敷き、そして寺子が其處へ集つて字を清書するのです。字は大抵大字を書くのですが、女の子は散らし書なぞをもします。父兄や卒業生等も來まして、墨をすつてやつたり、紙を延してやつたりして、子供を助けます。出來上つた成績品は、部屋の中、或は門外、又は氏神の社頭等に掲げて飾る、地方によつては、土地の老弱男女が集り來つて、それを觀覽して批評する。之は三都を始め、名古屋・金澤・仙臺・富山・奈良・廣島・長崎等では、非常に盛に行はれたものですが、都會だけではありません、全國の田園村落を通じて凡ての寺子屋の約六割位は行つて居ます。其時の成績品が、若干私の手許にもございますが、仲々見事なものがありまして、それを見ると、流石に習字は、今日と違つて大分、上手に子供が書いた事を立證し得るやうに思ひます。それは又寺子屋師匠の力量を世間に示し、父兄に滿足を與へ、江戸や大阪の大きな寺子屋では、この席書と云ふものが、師匠の評判を高める尺度とされて居つたやうであります。次に天神講と云ふのは、之もその起原は矢張り書家の會合から起つたものであることは「尺素往來」等によつても判りますが、寺子屋が菅公卽ち天神樣をば筆道の神、文學の神として尊信致しまして、之を守本尊として祀りました所から、師匠と子供と一同會合する行事として、天神講といふものを行つたのであります。一體寺子屋が菅神を尊崇して守本尊にしたことは著しい事實でありますが、菅神に對する民間の尊崇は寺子屋が起つてから始まつた事ではなく、その以前からかなり廣く行はれて居た事でありまして、例へばお宮參りや、七五三のお祝や、お正月の神詣で等

にも、天神樣にお詣りして子供の前途の發展を祈ると云ふ事が、頗る廣く行はれたのでありまして、この民間の信仰に結合して、寺子屋は天神樣をば守護神と仰いだのであります。それで、その屋敷の中に社を建て、天神樣を祀つた處もありますし、近い處の天神樣へは使ひ古した筆を奉納して天神樣の境內に筆塚を拵へるとか、新しく買つた筆は一度、天神樣に供へて、それから下して使つて書道の上達を祈るとか、特別の尊信を捧げたものでありますが、殊に毎月二十五日には、菅神の畫像を飾りまして、師匠も寺子もその前に集つて、樂しい一日を送ると云ふ事にしたのが、この天神講であります。處によつては席書と一緒にこれを行つた處もあります。又文珠講といふのは、その起りは恐らく僧侶が師匠であつた場合に行はれた事であらうと思はれます。文珠といふ言葉は智慧を意味し、文珠菩薩は智慧の佛でありますから、その文珠菩薩を祀ることによつて、樂しい會合の行事を意味づけたのでありませう。然し之は九州地方に大分ありましたが、全國的には割合に少ないのです。

室內の行事が斯樣に盛であつたのに比べて、戶外の行事は頗る少なかつたのであります。勿論都會の地では、花見だの、遠足だのと云ふ樣な事が、體育と云ふ見地よりは寧ろ慰安の意味で行はれましたし、又兒童の爲といふよりは、寺子屋自身の宣傳の爲に、世話人や父兄が肝煎となつて行つたやうであります。江戶等では—甚だそれが華美に流れた爲に—町奉行から之を取締つた事も、嘉永元年二月にはあります。併し田舍では、さういふ行事はなく、近所の野原や川端の廣ッ場や鎭守の森等が、寺子の自然の遊戲場であつたのであります。それですから、これを監督すると云ふ事が之が又、先生達の關心を要した事であつたのであります。例へば、寺子が寺子屋への來る道、歸り道で喧嘩をする。之は今日とは違つて、村と村との間とか、部落と部落との間とかの子供の喧嘩は仲々多く、男の子供の殆ど年中行事の一つであつたとも申して

よい程でありましたから、師匠の方で大に注意しなければならぬ事であり、又時候によりますと、例へば夏等は寺子屋の歸りに、直ぐ家へ行かないで、川へ行つて泳ぐ。誰も大人が居ない時に泳ぐのですから、時としては不慮の禍を來すやうな事がある爲に、子供が歸りに泳がない樣にする必要がある。それで子供の手に印を捺すことにした師匠があります。水泳ぎをすると印が消えますから翌日手改めの時にそれが發れる。子供も却々段々考へて、泳ぐには泳ぐが、手を上げて頸の邊迄這入る。その中についい手まで入れて、翌日先生に叱られたなどの事も往々あつたと云ふ插話も傳つて居ります。

斯くてお話は訓練、即ち躾の問題にと移り行く譯でありますが、寺子屋の訓練は存外よく行屆いてゐたものであります。之には色々の事由がございませうが、先づ寺子屋の經營者が即ち師匠でありまして、先生即ち經營者であります。そして可なり多くの場合、寺子屋は代々續いて居りまして、同じ家の親をも教へたが子をも孫をも教へる。寺子の方から申しますと、お祖父さんも彼處の寺子屋に行つたのだが、お父さんもお世話になり、こんどはその子もお世話になるといつた風で、學ぶ方の者も、教へる方の者も、累代續いて居るから、父兄には先生を充分に尊敬すると云ふ美風が出來、師匠には子供に對して既に最初から親しみを持つて居ると云ふ溫情があり、さうした空氣が、言はゞ綿密縫の如くに子供を取圍んで居たのでありまして、設備等は頗る不完全であつたに拘らず、躾は可成りによく行屆いて居たのであります。それに、入學の始めに於て「何卒嚴しく御賴み申します」と云ふのが、子供を賴む親の決り言葉であり、「それではお世話致しませう」といふのが、師匠の決り挨拶でありました。彼の淨瑠璃の「菅原傳授手習鑑」の第四、即ち俗に所謂「寺子屋の段」で、あの松王丸の子の小太郎を寺子屋に賴みに來た母のとなみの言葉に「この腕白者をお世話下さりよかとお尋ね申しにおこせましたが、おこせ世話してやろ、との結構なお言葉に甘へ、早速連れて參じました」と言つてゐるあの口上の氣持が、入門させる親の氣持であり、又預る師匠の氣持であつたのであります。明治維新前後の頃になりましても、「どうぞ嚴しく御賴

み申します」と云ふのが、江戸では通り口上でありましたし、又「それではお引受致します」と云ふのが、之もが亦師匠の通り挨拶になつてゐました。斯やうな約束の下に引受けて世話するのですから、躾は相當嚴重であつたと同時に、事實それが却々巧みに行はれて居るのであります。例へば手習をして居ります時にも、子供のことですから騷がしくなる。さうすると師匠或は助教が唯一言「無言」とか、女座には「御無言」とか言ふ。「口を利くな」と云ふ意味です。するとこの一言で忽ち靜肅になる。暫く經つと又騷がしくなる。と又「無言」で靜まる、といつた風で、「無言」の一語で一時間も二時間もの靜肅が保たれてゐたのも、巧みな取扱と申さなければなりません。マリア・モンテッソリーが、沈默によつて幼兒を躾けた話を、その著書の中に書いてゐますが、相似た趣意だと思はれます。

無論徒ら兒もゐますから、寺子屋には罰則もありました。直立をさせるとか、捧滿といつて、茶碗に水を盛つたものを捧げさせるとか、或は火の付いた線香を持たせるとか、居殘りをさせるとか、手の指を小撚やかんじんよりで縛るとか等が事實行はれたのであります。併しそれは特別に企んだ處罰、子供を虐める爲に造り出した罰則ではなかつたのであります。之に就ては以前には誤解が世間に傳はつてゐましたから、一應辯明しておく必要があると存じます。寺子屋は、何と申しても、習字本位の設備でありましたから、硯に入れる水を盛つた茶碗は、どんな小さな田舍の寺子屋にも備へ付けてあつたものです。惡戲子は何かやらしておかないと仕末におへませぬものですから、その茶碗を持たして置いたのであります。又今日と違つて時計の無い時代ですから、時間は線香で計つたものでして、その時間を計る爲に火の付いた線香は、師匠の座邊には必ずあつたものですが、その線香を惡戲子には持たしておいたのです。然るに、それをば、水の一杯這入つた茶碗を高捧げさせておくと、どうしても澪す、澪すといふと、それは怪しからぬと言つて、更に嚴しい罰を課する爲に、さうさせたのである、とか、或は火の付いた線香は、仕舞ひには指に近くなつて熱くなるから、勢ひ放す、放すとそ

れは以ての外であると言つて、更にお灸をすゑる爲に持たせたのだとか、色々の言傳へが傳はつてゐたのでありますが、それ等は皆、認識不足に基づくものであります。居殘り即ち留置も隨分命じたものでありますが、さて夕方になつて暗くでもなつて來た時には、子供一人を歸すのは隨分心配なものですから、斯樣な場合には寺子屋に宿らせたやうであります。これに就ては次の樣な話がございます。あの安政の大地震の時に、深川のある商人の子供が大川を一つ越えた日本橋の信古堂といふ寺子屋に通つて居ましたが、何か惡戲をしたものですから、居殘りを命ぜられた。併し大分遲くなつたものですから夕暮に大川を渡つて一人歸すのは、心許ないと、師匠が思つて寺子屋に宿らせたのです。所がその晩があの大地震で、その子の深川の家は潰れてしまつて、家族が皆な死んだのですが、日本橋の信古堂は幸に倒れなかつた爲に、そこに宿められた子が助かつたと云ふ事實があるのであります。それからこの子は、この偶然の命拾ひ、それは居殘を命ぜられた爲ではなくして、遲くなつたから歸すのは可愛想だと云ふて師匠の家に宿められたその溫情の爲に自分が無事に一命を拾つたといふことを非常に有難がりまして、それからは其日には必ずその寺子屋に禮に來たと云ふのであります。この子は其の名も判つて居り、明治維新後相當有名な實業家になつた人であります。

かの有名な渡邊崋山の書いた寺子屋の圖があります。「一掃百態」といふ崋山の畫集にも取つてある圖ですが、あれを見ますと、田舍の寺子屋の有樣が描き出されて居るのでして、師匠は袴をはき、刀を一本帶び、腕まくりをして子供に素讀を教へて居る。田舍の寺子屋師匠には、あゝした威嚴を取るといつた風は確かにあつた樣です。又浮世繪師の鍬田熙齋の描きました「職人盡し繪卷」があります。これは上野の帝室博物館に所藏されて居りますが、樣々の職業の姿を描いたものでして、その中に寺小屋の畫があります。それを見ますと、一方には子供が幾人か手習をして居る。他方に罰則を課せられて居る子供がある。机を二つ重ねた上に据えられて、右の手には茶碗を捧げ、左の手には線香を持ち、師匠は其前で眼

を剝いて、肘を張つて今にも打ちかゝらうとする姿を示してゐます。之はごうも少々大袈裟に描き出されて居ると思はれますがその横に、師匠が口で言ふた樣に、蜀山人卽ち太田南甫が詞書をして居ますが、その詞書は、「二ヶ親にきと、斷り申さん」卽ち親に必ず知らせるといふ意味ですが、之は非常に面白い事だと思はれます。と申すのは、兩親に知らせられると云ふことは、子供の最も恐れた所でありまして、さうなると、子供が茶碗を持たせられる所の叱られ方では濟まなかつたので、もつとひどい折檻を親から受けなければならなかつたからです。斯樣に師匠が非常に强く怒つた場合に、それを執成する爲に「あやまり役」と云ふものが出來て居た所があります。之は近所に住んで居る上品なお爺さんかお婆さん、比較的暇があつて生活にも困らず、時々寺子屋の世話をして呉れるお爺さんかお婆さんで、それが執成して「マア〳〵私が代つて誤りますから」と云ふので、師匠の威嚴をも損はず、子供が家庭にも通告せられずに濟むといふ工合になつてゐたやうです。普通の寺子屋では、師匠の妻が、概ねこの「あやまり役」を勤めて居たやうです。

尤も、師匠が嚴格であると云ふ事が、一般に父兄からは希望されて居つたのでありまして、嚴肅な師匠は「雷師匠」と云ふ名稱で呼び稱へられて居つたものです。一體、雷師匠と云ふ言葉は、何う云ふ意味でありますか。吸鳴るからと云ふのか、叱るからと云ふのか、乃至は雷名を轟かせると云ふのか、色々に考へられますが、兎に角傳說は勿論、この頃の隨筆や記錄等にも往々見えて居るのでして、例へば「四壁庵茂蔦」と云ふ人の隨筆「忘れ殘り」の下の卷にも「雷師匠」と云ふ題目を揭げて「日本橋佐內町」に中與兵衞號石水といひ、手蹟の指南をなす。弟子男女五百人に及ぶ。人と爲り嚴にして和顏を見せず。弟子師に面する時は、寒からずして粟す。しかれども、書法を授くるに及では、丁寧なること慈母の幼兒を扱ふ如く、こゝに於て人々其子をこゝに賴む者多し」と書いてあります。然し中與兵衞と云ふ人だけじやありません。斯うした類は外にもありますので、淺草の聖天町にありました、龍川堂といふ寺子屋の師匠寺部麟盟も、龍川堂が雷門の近所にあつ

た所から「雷門の雷師匠」と呼ばれましたし、神田の鍛冶町にありました雲陽堂といふ寺子屋の師匠石黒辨山も、雷師匠と呼ばれたのでありまして、その記念碑が谷中の天王寺の境内にありますが、それに「世人因つて目するに雷師を以てす」と云ふ文句が刻まれて居るのが、今も讀むことが出來ます。斯ういふ例は、外にもまだありますが、要するに、呶鳴つた爲でも、叱つた爲でもなくて、嚴格な先生に對する畏敬の稱號であつた樣であります。無論今日と違ひまして、體罰も若干行はれたことは、直前に申上げた通りであります。併乍ら之を西曆十七八世紀の頃にヨーロッパ等の學校で行はれた體罰に較べますと、餘程溫和なものであつたと言はなければならぬのであります。學校に於ける體罰の歷史と云ふものを調べて見ますと、ヨーロッパやアメリカ等でも、以前は隨分嚴しい罰が加へられたのであります。アメリカのモンローが編纂した教育辭典を見ますと、イギリスの或記錄によると、五十一個年間小學校の教師を勤め、その後半は校長を勤めた一教師が、その生涯の間に、生徒を鞭打つた事が實に約九十一萬五千回、棒で叩いた事が百二十一回、監禁した事が—居殘りに當るのですが——二十一萬九千回、棒で突いた事が十三萬六千回、耳を强く引張つた事が十萬二千回、罰課として暗誦を課した事が一萬七百回、ビーチと云ふ尖つた木の責道具の上に坐せしめた生徒の數が七百人、木の端の危險な處に跪かしめた生徒の數が六千人、といふやうなことが計へ上げられて居るのであります。之は恐らく極端なものでありませうが、併しビーチだとか、その外色々の責道具が學校にあつた事は事實であります。イギリスやオランダの古い學校には、今でも其遺物が保存されて居ます。繪畫等を見ましても、當時の學校の有樣を描いたものには、先生が必ず鞭を有つてゐます。ロンドンの有名なブリッチッシュ・ミュージアムには、僧侶が子供を打つて、子供はその前にひれ伏してゐる名畫が掲げられてゐます。又アメリカのドルチェスター市の學校規程の中には「鞭は神の命令である云々」の文句がありまして、卽ち教師が子供を打つのは神の命令を行ふのであるから、これは當然のことであるといふ意味でありませう。尤もこれ等は以前

の事でありまして、今日の法令ではありませんけれども、以前は外國の學校の罰則は、隨分嚴酷なものであつたのでありますが、之に較べますと、日本の寺子屋のそれは、頗る穩やかなものであつたのであります。吾々日本人と云ふものは、由來決して殘忍な事をしない國民であります。殊に若い者に對して、幼ない者に對して、殘忍な事をしなかつた國民なのであります。却つて兒童愛護の精神と云ふものが、比較的早くから發達してゐたのであります。私はずつと以前に、ドイツのベルリンに居ります頃に、丁度その少し前にかの有名な「兒童の世紀」を書きました、エレン・ケイ女史がベルリンに來られたので、私がこれを訪問したことがありました。その時ケイ女史が「日本では上流社會は勿論、下層社會でも子供を大さう可愛がると云ふ事を聞いて居りますが、さうですか」と訊ねられました。私は「さうです」と答へ、そして直ちに「何うして、あなたはそれを御承知ですか」と反問した所が、女史は「それは、イギリス人やフランス人の書いた日本旅行記を讀んで知りました」と答へられた事を、私は今も覺えて居りますが、斯う云ふ旅行者の眼にも映じた如く、吾々日本人がよく子供を愛護すると云ふ事は、之は我國俗の一特色であると申してよいと思ふのであります。之に就て一つの意味深いお話を申上げて見ようと思ひます。それは、嘉永三年十月に、湯島天神の社の前に奇緣氷人石といふ碑を建てた人があるのです。高さは六尺ばかりで、七、八寸四方の、小松と云ふ立派な石でありますが、その表面に「奇緣氷人石」と彫り付け、向つて右の方の側面には「たづぬる方」又左の側面には「をしゆる方」と刻んである。それは何う云ふ意味かと申しますと、子供の迷子になつたのを見付けた人は、その子供の年格好や顏かたちや着物の樣子などを詳しく書いて、その紙をこの「をしゆる方」である方の所に糊で貼つて置いて、尋ね探す人の便に供するのです。それから又子供を見失つた卽ち迷子にした親は、これ亦その子供の有樣を詳しく書いて「たづぬる方」の方に貼つて置いて、便りを求める、その仲立をする爲に建てられた碑であります。たづぬる方とをしゆる方との媒介を爲す石であるから氷人石と名付け、斯ういふ便利な方法で、不思議な

緣を結ばうと云ふ所から、これに「奇緣」と冠させて居るのです。然もその碑を拵へた人が自分の名を出さず、全く自分の費用を出して兒童愛護の爲に立てたのであります。尤も之は全然この施主の創意ではなく、それと同じものが、既に京都の北野天滿宮の境內には以前からあつて、大變便利であると云ふ事をこの人が見て來て、そこで湯島天神の境內にも之を立てたのであります。之は「江戸年中行事」といふ當時の本に載つてゐることですが、とにかく北野天神境內のそれといひ、又湯島天神境內に新に立てられたそれといひ、己が便を計ることをば他人の便にまで押し擴げ、吾が子を愛すると云ふ事をば人の子の上にまで及ぼすことによつて、愛兒の道を進めたものでありまして、まことに自他を包攝したる大きな意味に於ての兒童愛護の觀念が當時——嘉永三年の頃——に於て民衆の間に高まつて來てゐた一つの立派な徵標と見てよいと思ふのであります。

斯うした兒童愛護の觀念と、他方には世の中が幕末から明治の新時代に移り行かうとする多事多端の繪卷を繰擴げたる時勢に際會致しまして、子供を發育する事の必要は、都鄙を押竝べて益々痛切に感ぜられて、兒童教育は存外よく進められたのであります。從つてこの頃は、本州・四國・九州は申すに及ばず、佐渡・壹岐・對馬等の島國は勿論、伊豆の八丈島でも、薩摩の大島でも、寺子屋はそこにございました。今の北海道でも、既に函館には、安政二年から幕府の醫官が立てた學校があつたのであります。斯くて文字通り、全國津々浦々に普及して居つたのであります。從つて大きな都市や船の出入の多い港町には、江戸や大阪等のそれに劣らぬ規模と內容とを持つた寺子屋がございました。一寸若干の實例を擧げてみますと、之も當時の教育の有樣で、今日のそれとを結付ける上に參考になると思ひますから、申上げることに致しますが、北の方から言ひますと、奧羽地方では、秋田には赤津と云ふ人の寺子屋は、間口四間奧行二十五間の二階建の隨分大

きな寺子屋でありまして、階上は主として女の子の席、階下は男の子の席としました。在席兒童數は男女合計四百五十人と稱せられた。無論之は在籍兒童數で缺席する者が相當に多いことは、前に申上げた通りであつて、日々出て來る子供の數はその七掛乃至六掛位であつたのであります。之は五代も續いた寺子屋ですが、その四代目の師匠の子に――養女でありますが「ゆき」と云ふ女の方がありました。この方は秋田縣女子師範學校の教師になつた方であります。北陸の方に廻ると、富山に小西氏の臨池居と云ふ寺子屋がありました。これも大きな寺子屋でして、間口八間奥行十四間、總二階の建物でありました。茲では上級と中級と下級とに分けて立派に學級編制をもつた學級教授が行はれたのでありまして、在籍兒童數は最盛時には約五百を上下してゐます。この臨池居の後になる小西有義といふ方は、後に富山縣の師範學校の習字と漢文の先生を二十個年間も勤めた方であります。それから近畿地方で申しますと、これは大都會でありますが、大阪で根來忠次郎と云ふ人の開いた龍雲堂といふ寺子屋で、この忠次郎と云ふ方が實に立派な方でありまして、孝行師匠と呼ばれ、町奉行から旌表せられ、大に德化の及んだ方であります。この東京女子高等師範學校を早い頃卒業せられた大江政衛女史はこの忠次郎から三代目に當る師匠のお子さんであります。それから幼稚園に關係のあることを申してみますと、播州兵庫の二ッ茶屋村で間人市郎左衛門の開いた寺子屋は、寺子の殖えるごとに家屋に增築を加へ、後には座敷も椽側も皆使つて教場にして、辛うじて三百に近い寺子を收容して居りました。この市郎左衛門の子でやはり市郎左衛門と呼んだ方の妻のたね子と云ふ方は、明治二十年の三月から幼稚園を開いて幼兒教育に盡瘁せられた方であります。それからずつと西へ行つて、九州で一つ申上げますと、長崎で笹山源之助といふ人の創めた奇石軒と云ふ寺子屋は隨分多くの寺子を持つて居たのでありまして、「日本教育史資料」の寺子屋表には、嘉永七年の調査で、兒童數男三百四十六、女百五十、合計四百九十六と擧げて居ますが、安政の末頃在學した故老の記憶によると、男約四百、女約三百、計七百の兒童を有つてゐたと

のことでありますから、嘉永後益〻繁昌し、殊に女兒の入學が著しく殖えたものと思はれます。斯う云ふ大きい寺子屋になりますと、校舍は二階建の家屋二棟から成立つて居まして、師匠の居間になつて居る十疊敷一間を除く外は、階上、階下は勿論、臺所・廊下等に至る迄、家の中は悉く子供の座席として使はれて居たのみならず、今日の所謂二部教授の上に、夜間まで教授をしまして、即ち三部教授を致すことによつて、やつと學習をさせたと云ふことでありますし、殊に女兒には課外として、小笠原流の諸禮及び料理、今日の家事科に當るものをも授けて居たのは、流石に外國文化吸收の港である長崎であつたからとはいへ、隨分進んだ内容を持つた寺子屋であつたのであります。

私はずつと以前に十七、八年間かゝりまして、寺子屋の教育を研究致しました。その際、嘗て寺子屋の師匠をした人――これは極く僅かより殘つて居りませんでしたが、それでも五十人許り得られましたが、――それから助教をして居た人、師匠の家族であつた人、乃至寺子として寺子屋で學んだ實歴を有つてゐる人等合計三千九十人の體驗記述を材料と致しまして、統計的に研究調査を加へたのでありますが、それに據りまして、全國に於ける兒童就學の當時の狀況を、――即ちこの話の一番始めに大體概言的に申上げておきました所を、やゝ具體的に然も簡單に申上げて、このお話を終らうと存じます。それは先づ、都會と田舍とによつて著しく違つたと云ふ事であります。即ち之等の體驗者の供述された報告の中、その地の子供が殆ど全部通學したといふもの、或は大多數通學したといふものは、大抵、城下町、それから都市、それから交通の衝に當つた驛邑、及び商港であります。殆どさういふ所に限られて居るのであります。之に反して、大多數は通學しなかつたとか過半數は通學しなかつたとか云ふものは、概ね田園村落であります。さうして見ると都會と村落との間に著しい相違のあつた事が解るのであります。所が、次に、都會と村落のそれよりも、もつと大きな開きを見せて居るのが、男女の性別に現はれたる就學の差違であります。即ち、その地區の兒童の殆ど全部が通學したと云ふものでも、

何れも、女子には多少の例外があるこ云ふ事を申して居りますし、それから過半數通學したこか、約半數通學したこ云ふものゝ如きも、大抵、女子の不就學の爲にさうであるこ申して居ります。それで女子の就學歩合の良好であつたのは、殆ど都市ばかりでありまして、驛邑になりますこ、もう前者に比して可なり劣つて居りますし、寒村孤落に至つては、その絶無こ云ふ處さへ隨分多かつたのであります。斯くて、兩性の間に存在した開きは、都鄙の間に存在した開きよりも、もつこ大きかつたのであります。勿論寺子屋に通はなかつた者は皆無學文盲であつたこは申せません。殊に女子には、家庭で若干學習する風もありましたし、又通學の困難もありましたし、それ等の色々の事情をも充分に斟酌して考へなければならないのでありますが、兎に角、女子の就學が一般に男子のそれに較べて甚しく劣つて居たこ云ふ事は、事實であります。惟ふに兒童の教育が、都會から村落へこ押及んだのは、丁度澎湃たる水の流が、地續きの地へ流れ込む如くに、易々こ流れ込んだのでありませうが、男女兩性の間にはかなり大きな障碍物が横つてゐて、教育普及の波が、大分そこで遮られてゐたやうであります。この障碍物を全く撤去して了ふこ云ふここは、明治の教育—それも少し經つてから後の普通教育の勃興に迄持ち越されざるを得なかつたのであります。

併し教へる方の側に於きましての女性の盡力進出こ云ふものは、之はかなり以前から隨分よく現はれて居るのであります。今日御集りの方々は女流教育家の方々でありますから、この點に就てだけ一言申上げておきませう。この頃の寺子屋は、尠くこも都會に於きましては大抵一家總掛りで、師匠のみでなくその妻が之を助け家族も之を助ける。細かい躾なこに至つては、男の子供は男の師匠が、又女の子供は師匠の妻が、世話をし面倒を見たこいふ場合が、極めて多かつたこ云ふ事を前にも申上げておきましたが、それはまあ主人が師匠であるから、一家總掛りで之を助けたこ云ふ意味で、婦人が大いなる盡力を致して居るのでありますが、その他に、婦人が自ら師匠こして立つたこ云ふ場合もかなり古くから相當に

多くあるのであります。具體的の實例を申上げて見ますと、德川幕府に於きまして寺子屋の師匠を旌表することは、八代將軍吉宗の時から始まつて、その後も度々繰返されて居るのでありますが、天寶十四年六月、卽ち水野越前守が老中であつた時に、江戸の町奉行が優良な寺子屋師匠十二人を選奬して居ります、その中に女性が三人あるのであります。十二人の中に三人迄が女性であります。それから同年の十一月、又その翌弘化元年の七月と、引續き二三度選奬されてゐますが、その中にも若干名の女性が加つて居るのであります。又それよりも少し以前の文政四年に出來ました「筆道師家人名錄」と云ふ書物があります。これは當時の寺子屋師匠の名簿でありまして、その著者村上歸旭といふ人も寺子屋師匠なのですが、この書物には江戸の寺子屋師匠が四百七十九人擧げられて居ます。其等をずつと拾ひ分けて見ますと、其の內譯が男子三百四十人、女子百三十九人になります。女師匠が全體の二割七分弱を占めて居るのでありまして、男子の數の三分の一强に當つて居るのであります。實に今を去る事百十六、七年前の事でありますが、これを見ると、この頃から既に女性が相當によく兒童教育に從事せられたのであつて、我國の兒童教育の發達は、實際に於て、餘程以前から女流教育家の協力に俟つたのであります。この點に於て私達は兒童教育の名に於て、女流教育家に感謝の意を披瀝しなければならないのであります。

尙申上げ度い事は色々ございますが、餘り長く御聞きを煩はすのも恐縮ですから、これで一應終と致しまして、御質問でもありますれば、私の知つて居ります限り悅んで御答申上げ度いと存じます。長きに亙りましての御淸聽を感謝致します。（以上）

（昭和十年十一月九日講演）

子供の繪（其三）

菅原教造

（八）心境の繪の誕生

前の「人と自然」と言ふ項目で、人間とは何ぞやと言ふ事を、いろ〳〵の言ひ現はし方で申して見ました。今度は、この同じ問題を、別な言ひ方でお話して見ませう。先きに、「向う側」と「此方側」とを一とまとめにして、天來の斷案とも素の心とも言つた事を、一つこゝで言ひ直して見ませう。非常に簡單に言ひ直せば、それは向きと言ふ事です。更にこの向きと言ふ事を、一層人間らしく言ひ換へれば、向けられてあることになるでせう。天來の斷案とは向きと言ふ事です、素の心とは向けられてあることです。

人間と言ふものは、人の氣持と言ふものは、絶えず休みなく走つてゐるものです、絶えず磨かれてゐる氣合ひです。この鋭い氣合ひを一言で言つて見れば、あてに向つてゐること、即ち向きと言ふ事になります。向き――と言ふのは、所謂知情意を一つかみにしたその心棒と言つてもいゝでせうし、又知情意などを突つ放したピンと張り切つた心境、ツーッと通り貫いたたゞ一本の筋であると言つてもいゝでせう。强いて意識の方の言葉を使ふとすれば、思惟の閃きであり、叡智の輝きです。

知情意を一つかみにすることか、知情意を突つ放すことか言ふのは、その根本の特徴を言ひたいからです。人間と言ふものの本性を話したいからです。昔から、今でもさうですが、人の心を說く場合に、必ず、本能とか理性とか、思惟とか直觀と

か、知情意だとか言ふやうに、きまり切つて、何でも差異・區別・分類を土臺にして說く惡い癖があります。その方が學問的だとでも考へてゐるのでせう。さう言ふ專門家に對して、「一體、學問が大切なのか、さういふ學問が研究の目あてにしてゐる人間の方が大事なのか」、と質問したくなります。差異點を詮議してゐると、人の心が切れ〳〵になつて見えます。そんなことをするよりも、共通點、根本の筋を摑む事を考へたらいゝでせうに……。感情とか情操とかは「氣持の調子、匂ひ、味」と言ふ事で、これは向きの見本のやうなものです。たとへば、豫感とはモヤ〳〵した向きです、好きや嫌ひや感激はハッキリした向きです。靈感（インスピレーション）とは的中した向きであり、同心（カンヴァーション）とは向きの更生であり、美感とは向きになり切ることです。又意志とか欲求とかは「ものにする氣持」と言ふ事で、ものに向つてビューッと飛んで行く矢のやうなものですから、意欲は向きそのものです。世間で本能々々とよく言ひますけれども、本能の脫皮したものが叡智・理性なんで、人はその叡智を握りしめてゐるんです。それを、その叡智にわざわざ變な皮を被（かぶ）せて、本能の何のと言つて騷いでゐるんです。叡智は「向きの向き」であり、眞實（ほんとう）でない何物をも何事をも赦さない裁きです。一點のくもりのない玲瓏透徹した利刄です。純粹そのものです。

このやうに、代表的に思惟とも叡智とも言はれる向きは、心と言ふものゝ意識と言ふものゝ本性です。それは、磨かれ磨かれて光り、脫ぎ捨て脫ぎ捨てゝ走る心境です。謂はゞ疾走そのものであり、神速そのものであるために、向きは純の純なものとなるのです。「あゝこれだ」とも「なるほど」とも思ふ暇のないほどの、ものごとが形を取つて現はれる前の、つまりまだ言葉の出來ない、言葉が固まらない、言葉にまとまらない前の心境です。言葉もまだ出て來ないと言ふよりも、實はしがみついて來ようとする言葉を、「まだ〳〵、そんなことでは駄目じやないか」と言つて、振り捨てゝ走つてゐると言つていゝ位、それ位鋭い凄い氣持の閃きなんです。一言で言へばたゞ速度そのものです。

今假りに、時間とか歴史とか言ふものを抜きにして、人と人とが――この「人」とは、人の中の人と言ふ事です――對してゐるとします。二人の向きが一つに合すれば、二人がキッと睨み合つたゞけで、あらゆる人類の生活史も文化も、たゞ一點に凝集されてしまつて、それであらゆるものごとが解決され盡すでせう。前に述べたやうに、十二卷のフィルムを一遍に見た事になるでせう。いつでも人間の世界が、實にごた〳〵してゐるのは、この凄い閃き、この叡智が、見えるか見えないほどになつて、あとはカスで取りまかれてゐるからなのです。文化はカスですから、いつまでたつても、カスは進みやうがないわけなんです。

この向きと向きとの交渉は、謂はゞ眞劍勝負の鍔競り合ひです。戰ひの終りの一瞬です。こゝまで來れば、もう理窟も技も何の役にも立ちません。最後の氣合ひ一つで勝負がきまります。純粹、エッセンス、叡智、極意、向き――これが人間そのものです。この一つが卽ち全部なのです。

人類生活のあらゆる型、たとへば、環境、民族、時代、傳統、地位、職業、性格、氣質、その他まだいろ〳〵あるでせうが、さういふ長いものに卷かれ、重いものに引ずられたら、この向き・この速度がどうなるのか。それに卷かれたり引ずられたりしないで、却つてさう言ふものを磨くのが向きの向きたる本分なのです。これが卽ち個性です。個性は不動智です。ジーッとしてゐるやうで、實は千變萬化してゐる動きなのです。個性は決して性格や氣質などゝ言ふやうな型の一種ではありません。絶えずあらゆる型を破りつくす鋭い氣合ひ……と言ふよりも、絶えず自分で自分の作り出した型を破る所に、個性の本性があるのです。自分で自分を殺して、その殺した一瞬に生きるのが個性です。

心境の繪の誕生を說く前置きが、大變長くなりました。この氣持の動き・走り・閃き――それは意識の元締たる叡智又は思惟、卽ち、「ものごとが形を取つて現はれる前の向き」であり、これがものごとの主人公です。この思惟・この主人公に對

して、この向きを現はす「これ〳〵かう〳〵」と言ふ言葉とか、この向きを現はす「こんな形」と言ふやうな思ひ浮べた心境の繪即ち心像とか、この向きを現はす眼で見る知覺物即ち畫面とか言ふやうなものは、一括して言へば直觀、即ち、「ものごとが形を取つて現はれたもの」であり、これは、主人公の後について行くお供であり、家來です。（註――こゝで言ふ直觀は廣義のもので、知覺と心像を包括したものです。狹義では知覺だけを直觀と言ひます。人によつては、「直接に眞理を把握する事」を直觀と言つて居りますけれども、こゝではそれを直覺と名け、直觀と區別して置きます）。

家來は主人公あつての家來であるやうに、直觀は思惟あつての直觀です。直觀だけではものにならないのです。自立が出來ないからです。たとへ思ひ浮べた姿（心像としての直觀）があつたにしろ、それが何であるかを意味づける思惟が閃めかなかつたら、心眼がものを見てゐるやうなものでせう。

勿論これと反對に、里惟だけ叡智だけがあつて直觀がなければ、それは、たとへば虛無を貫く一道の殺氣のやうなものです。これを摑むと言ふことは、何十年の人間の壽命をたつた一瞬で濟ましてしまふと言ふことです。その餘りにもの凄い氣合ひに擊たれて、大抵の人は氣絕してしまふでせう。それはまた、たとへばカスを拔きにした人類の生活史と言ふ事です。文化と言ふカスがあつて人類の生活史が成り立つのですから、さう言ふ境地は、たゞ一瞬の生活焦點となつて燃えると言ふことになるでせう。例の十二卷のフィルムです。

このやうに、直觀は思惟あつての直觀ですから、（五）の「子供の世界と大人の世界」といふ項で述べたやうに、心境の繪が浮き上ると言ふのは、決して單なる直觀、單なる心像だけでは無いのです。この直觀を主宰しこの心像を意味づける藝術的思惟が閃めくと言ふことが中心點になるのです。それですから、心境の繪は、思惟を中軸とし心像を胴として廻る獨樂のやうなもので、思惟と心像との一如一體の構成なのです。隨つて閃きが變れば姿が動きます、姿が變るのは閃きが動

くからなんです。

ごうしたら、ピッタリ的に中つた心境の繪が生れるか、比喩的の言ひ方になりますが、次にその徑路を述べて見ませう。思惟は走ります。走るから思惟なのです。走るこ言ふのは、磨かれ磨かれながら、カスを脱ぎ捨て脱ぎ捨てる事を、比喩的に言ひ現はしたものです。心境の繪がまこまるこ言ふ事は、思惟が心像を統一するこ言ふ事ですが。そのまこまつた途端には、思惟は餘りに鋭いものですから、もうその心像がカスになつてしまふのです。それですから、思惟は折角まこまつたものを、すぐ捨てゝ、次の階段に進まなければなりません。つまり走るこ言ふのは「まだ〳〵ものにならないよ」こ言ふ氣持なのです。思惟の率ゐる心像の群れが、まだ篩ひ落しが足りなく、或は大切なものを見落したりして、十分に統一されてゐないこ言ふここです。そこで叱られ通しの心像は、齒がみをしながら、「これでもか、これでもか」こ言つて、思惟のあこを追ひかけます。その思惟が、「もういゝ時分だな」こ思つて、ピタリこ立ち留まれば、それはハッこ氣合ひの懸つた所謂捨て身の一喝の瞬間です。追ひついた心像は、バタ〳〵こ思惟を取り圍んで展開し整列します。これが思惟こ直觀の融合統一の境地です。この一瞬が心境の繪の誕生の刹那です。しかもこの第一の誕生こ共に、すぐまた思惟は走ります。一旦自分でまこめた心像の直觀組織が氣に入らないものですから、それを捨てゝ走るのです。走るから思惟なのです。捨てられた心境の繪は、バラ〳〵になつて解體してしまひ、第二の誕生のために、すぐまた思惟のあこを追ひかけます。

「このやうに走つてばかりゐては、果てしがないではないか。一體、我々は何時になつたら落付けるのか」、實にさうです。人間の味は、實にこの果てしのない道を走り續けてゐる所にあるのだこ言つていゝでせう、これが「個性の無限性」であり、こゝに「人間の永遠の若さ」があるのです。もこ〳〵向きは鋭い・凄い・澄み切つた、醒め切つた氣持ですから、その追求には切りがない筈なんです。それですから、心境の繪は、出來てはほぐれ、まこまつては崩れるものにきまつてゐる

のです。しかし、こゝにたゞ一つ、「煮え詰つた點」と言ふ事が考へられます。これは、何遍も何遍も、やり直しやり直しってゐるうちに、我にもあらずフッと行きついた宿りです。自分では決して出來たなどゝ思つてゐないのですけれども、氣がついて見ると、それが何時の間にか出來上つてゐるのです。自分ではどうやらかうやらたどり着いた夜の宿なんですが、實は行く處まで行き着いた双六の上りになつてゐるのです。それは謂はゞカン所で、行き足りなくもなく、又行き過ぎもしないピッタリした急所です。二度と再びそんなものが手に入らない事もありませうし、うまくその呼吸がわかればあとがズッと樂になる事もあるでせう。それから先きは銘々の心の持ち方一つです。

向う側の立場で言へばカン所、此方側の立場で言へばカンです、實は同じものなんです。苦行をして成心を捨てると、その途端にカン所を捕まへる——捕まへたその刹那の氣持がカンです。「あの人はカンがいゝ」と言ふことを聽きますが、世の中に年中カンのいゝ人と言ふものはありません。ものにぶつかつた瞬間の正しい把握が、カンがいゝと言ふ事なんです。平常は樂に寢てゐていゝんですが、その代り醒めた時には凄い醒め方をするわけなんです。

ものごとがまとまる機會と申しますか、そのカン所と言ひますか、その究極點、つまり心境の繪の誕生のモーメント、これを更に別の比喩で話して見ませう。先きに出した例で言へば、心境の繪の誕生の瞬間は、廻つてゐる獨樂を見てゐるやうなもので、何處までが心棒で何處までが胴であるか、全く區別がつかないやうに、思惟と直觀とが一如一體のものとなつた刹那です。前に叡智は正味であり文化はカスであると言つたやうに。思惟は正味であり直觀はカスであるとすれば、心境の繪の誕生は、カスが正味になり切つた實にすばらしい瞬間なのです。又思惟は身體であり直觀は衣裳であるとすれば、心境の繪の誕生は、名人の舞ひを見てゐる時のやうに、衣裳が身體と一緒になつて生きてゐる刹那なのです。そこには拔けてゐるものもなく、締つてゐるものもなく、過ぎた所もなく、足りない所もなく、たゞフーッとあるべきものがある

だけなのです。いや、あるべきものがあるなどと思ふ間隙もないほどのものなんです。

苦勞してゐるうちに、いろ〳〵の心境の繪が浮び上つて來るでせうけれども、急所に嵌つた心境の繪は、たつた一つだけです。たつた一つがピカリと光り、トンと強く響くのです。そして、この心境の繪の中の心境の繪が一つだけ、すぐ畫面の繪になるのです。

叡智の凄さ・鋭さを、一瞬、肉づけした作品を、お目にかけませうか。こゝに掲げた支那の六朝佛がそれです。かういふ冷かに、捨て切つた、肅然としたものは、日本の天平佛などのフックリ人を迎へてくれる慈愛の相とは、根本的に違ふ所があります。それは醒めてゐる者と、眠つてゐる者との差です。又突つ放して考へさせる者と、抱きかゝへて甘へさせる者との差です。道、道理、向き、叡智、さういふ純の純なものは、(七)の「人と自然」の終りで述べたやうに、もと〳〵人間離れのしたものです。それを無理に人間的の形にしようとするのですから、つまり不可能を可能にすることなのです。それですから、この佛像を見て、どんなモデルを使つたかと言ふやうな事を、初めに考へてはいけません。もと〳〵人間的のものが土臺になつてゐるのではないのです。又この眉や眼や鼻や口や頬や頤などを一々眺めてから、さう言ふものを合せて、佛像の氣持を考へたりしてはいけません。部分が先きにあるのでも、形が先きにあるのでもないのです。先づ人間を離脱した刹那の鋭い叡智があり、ただ向きがあり、閃く氣配があり、凄い氣持があると考へるのです。それに感應して寄つて來たいろ〳〵な姿を、捨てゝゐる拍子に、フッと心境の彫像がまさまつたのを、石に刻んだのが、この佛像だと考へた方がいゝでせう。かう言ふ考へ方が、子供の繪を見る土臺になるのです。

又この佛像は、さう言ふ動きさういふ向きを、他人に知らせるために作つたのだと考へる事も、當つてゐないと思ひます。それよりも、千五百年も前の北魏の土人が、道のために、湧いて來たさういふ氣持を自證するのに都合のいゝ機會を

支那六朝時代の佛像

與へられたから、さういふ都合のいゝ生活瞬間に、それがうまくまこまつたのだと考へる方がいゝでせう。他人がこの作品をどう解釋するかなどゝ言ふ事は、恐らくはあまり考へてゐなかつたでせう。かういふ考へ方も、やはり子供の繪を見る土臺になるのです。

この彫刻を見てゐると、一體かういふ佛樣は、教へを說くのかどうか、と言ふ事が考へられて來るでせう。この佛樣も實は教へを說くのです。

やはり教へは教へなんですが、それは突つ放して考へさせる教へです。道の道、正味の正味、たゞ、閃き、燃える焦點を投げつけて、跡を見ずに、ツイとそのまゝ立ち去つてしまふのです。「本筋の事だけはハッキリ言つた、この通りにしなければ滅びるのだぞ。滅びたければ滅びるがいゝ」。と言ふ意味を殘して、何も言はずに往つてしまふのです。說く事は說くんですが、この說き方は、手を盡して解らせて人を救ふなどゝ言ふ甘い說き方ではありません。「解るかも知れない、又解らないかも知れない。解つてもいゝし、又解らなくつてもいゝ。解る者には解るのだが、そんな人には說く必要がない。又解らない者には聽かせたつて仕樣がない」。と言ふ風に說くのです。說くと言ひますけれども、實はそこに集つてゐる人達だけのために說いてゐるのではありません。そこにゐる見物は、ゐないと同樣なんですから、謂はゞ見物のない芝居をしてゐるやうなものです。そして結局、ほんとうの見物は自分一人だと言ふ事が解つたものですから、皆を捨てゝ往つてしまふのです。繪をかいてゐる小さい子供の氣持が、假りに大人に呼びかけるとしたら、かういふものじやないでせうか。

(九) 心境の繪と畫面の繪の間

思惟は走り走り走つて、直觀を構成したり破却したりして、心境の繪を練ります。人間の氣持・人間の思惟が向きである

と言ふのは、その向ふ目あてが、「道」であり、「道理」であり、「ほんもの」であると言ふ事です。「ほんとうのものごと」に向ふ所の向きであると言ふ事です。それですから、この氣持は單なる知でなく、行であり、信念です。一心に絶えずぶつかつてゐるうちに、ものごとの本筋の道が摑めるのです。此樣にして、練りに練つた心境の繪がまこまつた瞬間に、ピタリとそれがすぐ畫面の繪になります。大人の場合では、此二つのものゝ中間には、何物もないのです。畫面の構成に年月をかけて、非常な苦心をする所謂力作・大作は別として、小品卽ち卽興的の作品は、かういふ氣合ひから生れるのです。

子供の繪は皆小品です。小品ですけれども、大人の小品と違つて、小さい子供の繪——次に述べる第一・第二・第三の場合は、大人の所謂畫面の繪ではありません、大人本位に考へると、その前階段です。所謂、未定稿・試作・習作、或は下畫き・草稿で、いつも進行の途中にあつて、畫面は最終の仕上げになつてゐないのです。このやうに小さい子供の場合では、大人で言ふ進行中の心境の繪が、しかも子供特有の心境の繪が、そのまゝ畫面の繪になつてゐるのです。それですから、子供の畫面の繪は、子供の心境の繪なしには決して考へられないのです。

大人で言ふ畫面の繪と心境の繪との間に動く所のまだ文化のカスを知らない初心の構成、思惟を中心とする童心的な直觀構成、これがそのまゝ畫面の繪になつた場合が、右に述べた前階段です。子供の立場としては、それで立派な畫面の繪であるし、繪の方の大家には、それがよく解るのです。しかし一般の大人は、これを正當な畫面の繪と考へる頭がないものですから、こゝで假りにさういふ大人本位の名をつけて、前階段として置くのです。これが「心境の繪と畫面の繪の間」と言ふ事です。文化のカスを背負ひ込んだ大人には解らないんですけれども、これが小さい子供のものゝ摑み方であり、子供の持つてゐる世界の現はれであり、子供の創り出す繪の世界の誕生なのです。

この前階段の第一は、思惟卽ち向きの世界だけが、生き〳〵と活躍して畫面の繪を構成する場合です。これは科學者が、

カンヂンスキー作、コンポジシ』ン第五(1911)

分子とか構成式とか言ふやうな模型を使はずに、純粋な原理を考へる氣持と似てゐる面白い境地です。小さい子供は、夢中になつて、鉛筆をグル〳〵グル〳〵走らせます。大人から見て唐草模樣の無限の連續と思はれるやうなものが、大膽に紙面一ぱいに勢ひよく暴れ廻ります。いや、紙の外の机の上にまでも鉛筆が走ります。「これは、なーに」と訊いて見ると、「雨こんこん」と答へます。雨降りの氣持なんです。子供も雨も一つになつて畫面に跳び廻つてゐるのです。これを、全く繪の解らない西洋の兒童心理學者の眞似をして、引き搔き廻はしと言ふやうな意味の搔き畫とか錯畫とか濫塗などゝ、失禮な呼び方をせずに、本筋に從つて、「向きの繪」と名づけたらいゝと思ひます。大人の世界で、この向きの繪の調子で描いたものとして誰でも知つてゐるのは、カンヂンスキーの繪です。こゝに插繪として掲げたのは、「コンポジション第五」と言ふ作品です。

小さい子供の持つてゐる世界は、大人と違つて、個々

の事物の形とか、全體の場面の統一とか言ふやうな直觀組織が、まだ畫面にまとまりません。子供の生活には、直觀よりも先きに思惟だけが動くもの凄い所があります。そして、かういふものゝ摑み方、この純粹な思惟の閃き、向きだけの認識、子供はこれをすぐ畫面に移さうとするのです。謂はゞ、ただ氣を以て描くと言ふ心境なのです。個物的直觀や關係的直觀と言ふやうな仲介者なしに、いきなり思惟が畫面に飛び出すのです。それですから、畫面はたゞ思惟の走りとなり、連續した線となつて描現されるのです。子供の世界の全體の局面が向きの線となり、個々の物も、物と物との關係も、この線の中に含まれて描現されます。それですから、變な楕圓形がお父さんであつたり、一本の線が汽車であつたりします。この向きの繪は、向きとしての走りとしての認識の世界であるとともに、同時にそれが、「天來の圖案」であり、「素の裝飾」でもあるのです。これは謂はゞ「繪の素」であり、繪の出發點であり、源泉です。向きの繪は、見る通り、線の連續ですが、假りに前後がかすれたり切れたりして、一本の線だけが紙面に現はれたとしたら、それは專門の大家を驚かすやうなすばらしい味の線なのです。アダムの手によつて描かれたやうな、文化のカスにまみれない純粹な作品です。「アダムの線」です。

前に(七)の「人と自然」といふ項の自然についての第三の考へ方といふ所で、「技巧」の問題を說いて、踊りと工藝品と繪とを較べた事がありました。向きの繪は、向き卽ち「氣持の素」が、體の動き手の動きとなつて、そのまゝ畫面になつたものです。それですから、向きの繪は踊りの譜のやうなものです。今から二十年も前の事です。西川流の踊りの家元西川己之造から聽いた話があります。九代目團十郎が勸進帳の辨慶で延年の舞ひを舞ふ時、己之造は番卒として舞臺を勤めました。團十郎と言ふ人は、二十五日間の興行に、やまの置き所を毎日變へるので有名でした。この延年の舞ひも、やはり毎日少しづゝ違ふので、己之造は半紙に化粧用の紅を擦り込み、その下に白紙を敷いて、それを番卒の袴の下に入れ、その上から爪で筋をつけながら、師匠の舞ひの足ぎりを追つて行つて見ました。舞臺が濟んでからソッとその紙を取り出して

見ると、踊りの譜が赤い線となつて白紙の方に現はれます。今日の炭酸紙のやり方です。それを毎日取つて較べて見ると、何處をどう違へて舞ふのかゞハッキリ解つたさうです。踊りの方の人になると、足どりの譜を見たゞけで、辨慶の姿も動きも、ありありと出て來ます。大人はこの立場から子供の「向きの繪」を見て、考へ直さなければならないのです。

第一の場合がすめば、次の話はずつと樂になります。第二は、思惟が畫面の繪と心境の繪とを結びつけて統一してゐる場合です。つまり、向きの狙ふ直觀組織は、畫面の繪と心境の繪とが綜合された二重組織になつてゐるのです。このやうに、向きは絕えず心境の繪で畫面の繪を變化してゐるのですから、畫面を本位にして考へると、これは思惟が心境の繪によつて畫面の繪を補足してゐるものと見て、この第二の場合を、「補ひの繪」と名づけていゝでせう。

次に、之を織物の比喩で申して見ませう。織物は經絲と緯絲とで織り出されるのですが、「補ひの繪」の場合では、經絲が畫面の繪となり、緯絲が心境の繪となります。畫面としては、向ふに經絲が張られてあるだけで、他には何も見えて居りません。緯絲は此方で心境の繪として、解けたり結んだりして動いてゐるのです。思惟は此二つを統制して、其時〳〵に、色々の織物を織り出してゐるのです。それですから、經絲しか見えない大人には、全く此織物の見當がつきません。

西洋では、シェークスピーア時代の舞臺面は、背景を描く代りに、札を何々の森とか何々の河とか字を書いて立てたさうです。そして役者にその景色を精しく美文的に物語らせました。見物はその臺詞を聽いて、背景を自分で描き出してゐるのです。つまり舞臺面は一種の補ひの繪になつてゐるわけです。この節は、芝居の舞臺裝置が巧妙になりましたけれども、この國にはまだ、能樂といふ古典的な面白いものが繁昌して居ります。この點から考へても、又、茶の湯とか、南畫や俳畫などが悅ばれる所から考へても、日本人は、「補ひの繪」については、世界中で一番よくそのコツがわかつてゐる國民なんです。それが子供の補ひの繪のわからない筈がないと思ひます。

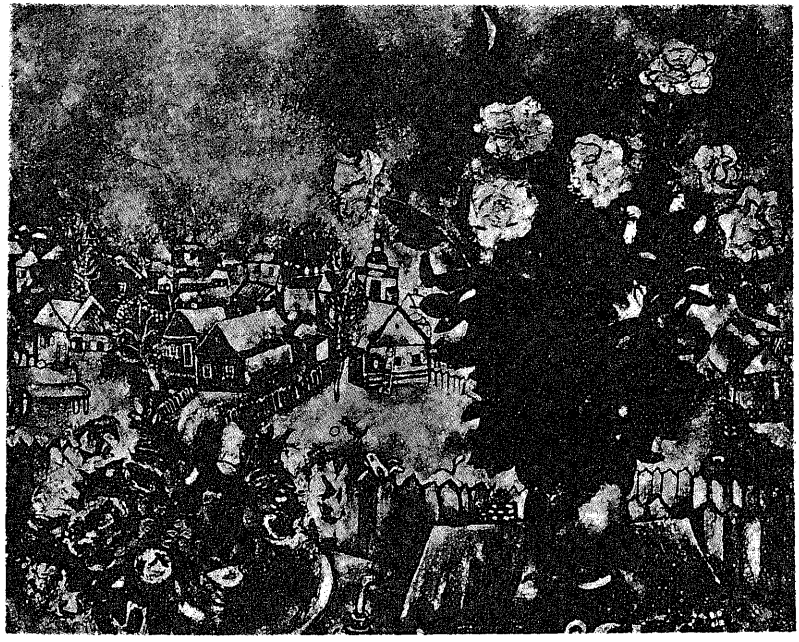
子供の「補ひの繪」は、實に天馬空を行くすばらしいものです。畫面の繪は、もと〳〵織物の經絲よりももつと自由なものである上に、更に心境の繪で變化されるものですから、この畫面の構成は、どんな事でも出來ない事はないと言つていゝのです。つまり、初めつから大人の考へた繪の法則を認めてゐないのです。普通、畫面と言ふと、大人は固定した平面を考へます。しかし補ひの繪の畫面は、劇の舞臺や映畫の場面のやうなものです。この畫面は、奥行きもあり、移動もします。大ざつぱに描かれたものは、立體的に活動し、彫刻のやうな重さを持つたり——隨つて畫面につゝかひ棒を描き添えたりするのみならず、色も勝手に浮んだり消えたりします。

第三は、思惟が走つて行くにつれて、つぎ〳〵に浮んで來る場面、さういふいろ〳〵の直觀組織を、一遍に畫面の繪にする場合です。此樣に、移り變つて行く心境の繪を、一緒にまとめて畫面の繪に組み立てるのですから、これを「組み合せの繪」と名けていゝと思ひます。もと〳〵かういふ移動的直觀組織の畫面は、從來の繪の法則から言へば、型破りなのです。

この繪は、思惟が個々の直觀を合成するのです。それですから最も本筋の所を言へば、「向きの繪」に直觀の肉をつけ心像の衣裳を着せたのが、この「組み合せの繪」であると言ふ事になるでせう。前に話したやうに、子供の生活では、心境の繪と畫面の繪との間に、大人ほどの差がありません。又心境の繪が何時までもハッキリしてゐますから、現在と過去との差が、大人のやうにひどくありません。さて、さういふ多くの心境の繪の中から、どの一つを選んで畫面の繪にしようかと考へる前に、子供はそれを皆畫面の繪にして見ようと考へるでせう。しかし皆と言つても畫面に制限がありますし、又組み合せる方法にもいろ〳〵の仕方があります。

大人の世界のかういふ組み合せの繪としては、歐洲戰爭のあたり、イタリーに起つた未來派の畫風は、その草分けでせう。こゝに掲げたシャガールの「花と風景」といふ繪も、この中に入るでせう。この繪を見ると、眼に見えてゐる室内の花

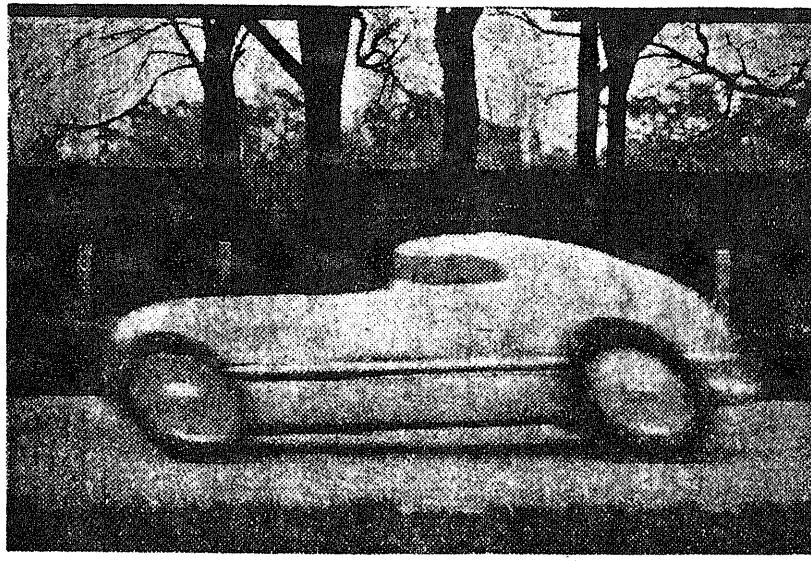
シャガール作　花と風景(1926)



の實景と、想ひ出として浮んだ風景の心像とが、一緒に畫面に描かれてあります。文學の方としては、岩波文庫に譯されてゐるビリニャークの小說「北極の記錄」なども面白い例でせう。又前に(二)の「繪の大道は一筋道」といふ項で出した插繪としては、「鋼鐵のクライマックス」と言ふ合成撮影の印畫もこのまとめ方をしたものです。こゝに出した插繪は、一時間三十キロ(一分間に四町餘の割合)の速度で走つてゐるドイツの流線型自動車を、フォーカル・プーン・シャターと言ふ撮影法によつて、自動車が動く瞬間々々に、横の狹い隙間から寫したものを、上へ上へと繋いで行つて、一つの畫面を組み合せたものです。合成の結果、こんな歪んだ形になるのです。

このやうに大人の世界では、藝術の上でも科學の上でも、組み合せ方がいろ〳〵工夫されて居ります。所が子供の世界になると、(二)の「繪の大道は一筋道」といふ項に出した四つの色鉛筆畫のやうに、も

走る自動車



つと面白い、大人から見て思ひもよらない奇拔なものが作り出されます。これは、子供が文化のカスを背負はされてゐないために、大人のやうに藝術上の型や科學上の理窟に捕はれない組み合せをするからなのです。第一で題だけを出して、まだ說いてない「天來の圖案」「素の裝飾」が、こゝでは「構圖」として、特有の味を出してゐるからです。この事は次に精しく申します。

「向きの繪」「補ひの繪」「組み合せの繪」と言ふ前階段を通り越せば、それから先きの子供の畫面の繪は、わかり易くなります。右に述べたやうに、實は假りに前階段と名づけた繪の方が、却つて面白いわけなんですけれども、カスの文化に中毒してゐる大人にとつては、それが尊とすぎて、わからないのです。(七)の「人と自然」といふ項で、自然は人が思ひ餘つて困つた時の道場であると申しました。この得難い道場が、人間仲間のこんな手近い所にあるのです。しかもそれは、私達の可愛い子供の持つてゐるものなんです。

幼兒の宗教教育

霜田靜志

一

或るキリスト教主義の幼稚園に三年程勤めて居た保姆が、嘗て私に次のやうな二つの疑問を提出して來た事がある。

一、園兒のKが肺炎で死んだ。その時他の園兒の一人が斯う言つた。——先生はいつも御用の濟んだ人が、神樣のお召で天國に行くのだと仰有つて居たけど、Kちやんは未だ御用がすんで居やしない、まだこれから御用が一ぱいあると思ふに、どうして天國によばれたの？

——先生はいつも天國つて神樣のお國だ、天國つてほんとにいゝ所だと仰有つて居るのに、Kちやんが天國に行つたのがどうして悲しかつたの？どうしてKちやんのお葬式の時あんなに泣いたの？

二、も一人の園兒、その子は幼稚園を修了して、小學校に這入つたのであつたが、或る日保姆の所へ來て斯う言つた。

——先生はエス樣が一番偉いんだつて仰有つたけど、學校の先生のお話だと違ふよ。學校の先生のお話では一番偉いのは天皇陛下だつて。それから家のお母さんに聞いて見たら、お母さんもさうだつて言つてたよ。エス樣が一番偉いんだなんて、先生嘘を教へたね。

子供から投げかけられた此の二つの疑問に對して、保姆は答へる術を知らなかつた。保姆は自分達の不用意に行ひ來つた宗教教育の弱點を衝かれて、何とも答へる術を知らなかつた。子供の前だけはよい加減に言ひつくろつて、其の場だけ

ごうにか濟ましたものゝごうにも濟まされぬ大きな疑問が後に殘つた。これをごう考へたらよいかといふのである。

二

此の問に答へる前に、私は、幼兒のための宗教教育なるものを、もう一度本質的に考へ直して見たい。

宗教保育を主張する人には常に言つて居る。幼兒の時期は、人間としての根底を基かれる。大事な時期である、此の時期に培はれたものは、其の人の一生を支配する大きな力となるものである、それ故に宗教教育は此の時期に於て、しつかりやつて置く必要がある——と。

此の主張は、尤もなる主張ではあるが、更に遡つて、それなら何故に宗教教育を必要とするか、此の點について考へて見ると、それは結局人間として立派なものになるために、人間として良き生活に入るために、爲されるものであらう。

人間は誰しも幸福を希つて居る。而して良き生活、正しき生活によつてのみ、眞の幸福は獲得する事が出來る。それ以外の幸福は、幸福のやうに見えても、實は眞の幸福ではない。宗教を信ずる人々が、信仰生活こそ眞に幸福なる生活である事を信じて、これを子供の教育の上にも及ぼして行かうとするのは、まことに尤もな事であると言はなければならない。

しかし乍ら同じく宗教教育であつても、キリスト教の宗教教育もあれば佛教の宗教教育もある、日本古來の惟神(かんながら)の道による所の宗教教育もある、而してそれ等の中にも亦樣々な宗派があつて、その宗派によつて色々な形態が生れて來る。

幼稚園に於ける宗教教育の如きは、左樣な宗派の形態を濃厚に持つて來べきでない、といふやうな事は屢〻言はれるけれども、既に宗教である以上は、その依つて立つ宗派の信條に根底を置かなければならぬやうになるのは當然の話である。

子供から提出せられたといふ、前記の二つの疑問の如きは、明かに宗派の信條による宗教保育の弱點を曝露せるものと

言はなければならない。此の幼稚園はキリスト教の如何なる宗派による幼稚園であつたか聞き落したが、子供の疑問を通じて推察するに、兎も角、現世の思想よりも、來世の思想に重きを置く宗派に相違ない。さればこそ第一の疑問の如きも起つて來た譯で、來世こそ完全なる理想の世界であつて、現世はそれに行くための準備の世界であるに過ぎない事を强調せられた時、あのやうな疑問も起つて來るのである。

子供から發せられた第二の疑問は、キリスト教と日本の國體との矛盾を曝露せるものであつて、當然起るべき問題である。殊に今日の如く日本精神が强調せられ、國體明徵が問題になつて居る時に於て、此の點は相當考慮せらるべきである。

いつだつたか新聞にも出て居た事であるが、聖公會の祈禱書の字句が問題にせられ、不敬に當ると言つて、注意せられ、之を改訂せしめる事になつたとかいふ事であつた。其の問題の箇所といふのはたしか、

「いと高き天の父よ、恩惠(めぐみ)をもつて我らの天皇を顧みたまへ」。

「願はくは我が天皇に幸福(さいはひ)を降し、眞(まこと)に主を敬ひ、主の榮光を顯はさせ給はんことを」

などの句であつたと思ふ。これは天地萬有を支配せらるゝ唯一神を崇めるキリスト教の立場からは當然の言葉であると思ふが、それが日本の國體の尊嚴と牴觸する事になるといふ、其處に考へなければならぬ大きな問題がある。

ニイルは「問題の親」の中で、斯ういふ事を言つて居る。——歐洲大戰中、英國人は神は我等に味方し給ふと言つて祈つて居たし、獨逸人も同じやうに神は我等と共に在りと祈つて居た。神樣はこれではぢつちに味方していゝか分らないではないか。人汝の右の頰を打たば左の頰をも向けよ、と言はれて居るが、敵の打つてかゝつて來るのに對して、從順に打たれて居る國がキリスト教國の何處にもないではないか。すぐにしつぺい返しをして行くのが何處の國でも當り前である。而もそれをキリスト教徒が是認し、寧ろ奬勵して居る。キリスト教の眞精神が何處にありやと言ひたい。——といふやう

な事を述べて居るが、國家主義とキリスト教主義との矛盾は決して日本に於てのみでなく、歐洲に於ても起つて居る事を明確に物語つて居るものである。

三

斯う考へて來ると、教育に宗教を採り入れる事が必要だからと言つて、どういふ宗教をどういふ形に於て採り入れるかに就いては、餘程考へなければならない。而して日本の國體に合致すべき宗教は、日本古來の神道より外はない。然るに今日までこれが餘り研究せられて居ない。其處には日本の民族性に根ざした偉大なる思想が藏せられて居るのであるが、多くの人々は、これを宗教と解しようとしない。それは宗教以外の祖先崇拜のやうなものだ位に思つて居る。近頃メーソン氏などのやうな外國人によつて研究せられ、今更乍ら其の偉大さを指摘せられて居る始末である。

大事な事は、日本國民のための宗教教育は飽くまで日本の民族性に立脚すべきものなる事である。佛教や基督教も、この日本の民族性と十分に融合した時、はじめて國民のための宗教教育として役立つのである。既に今日に於ては、それ等は十分に融合して居ると思ふのであるが、此の點に思慮を缺いた教師保姆は、動もすると其の取扱ひを誤つてしまふ。

凡て宗教は超國家的、超現實的な所を持つて居る。其處が宗教の宗教たる所であり、宗教の偉大さも其處にあると思ふのであるが、さればと言つて國家を離れた宗教、現實を離れた宗教は成り立たない。此處に微妙な關係がある。此の論の冒頭に提出した二つの疑問の如き、結局此の點についての取扱ひに失敗せるものであると言はなければならない。

そこで屢〻言はれる如く、宗派の信條や宗派の形式を餘りに固執し過ぎるから、さうした弊も生ずるのだ、といふ風にも考へられる。それ故に宗教教育は、殊に幼兒保育に於けるそれは、既成の宗教を學ぶべきでなくて、寧ろさうした宗教

に向つて行くべき基礎となる宗教性――宗教的情操――を涵養するこそ大切である、と言ふ事に當然なつて來る。

勿論私は、既成の宗教による宗教保育を否定するものではない。たゞそれ等の宗教保育が、どうかすると日本民族といふ固有な特性から離れる事を恐れるのである。それ故にどんな宗派の宗教保育でもよいから、それが眞に國民性に根ざした、現實の生活の上に立つものであればよいのである。

四

子供は兩親の影響によつて成育する。そして子供の宗教心も、子供の家庭生活、兩親の生活の間から自然に生み出されて來て居るものである。たとひ兩親が我が子に對して意識的な宗教教育をせずとも、兩親の生活そのものが無意識の間に子供に影響して居る。從つて兩親が信仰の深い場合は、識らず知らずの間にそれが子供の上に及んで行くし、兩親の神佛に對する態度が、自然のうちに子供に及んで行くものである。

そこで日本の現在のやうな、家庭によつて信仰が樣々である場合には、子供は樣々な影響を受けて來て居る。それ故に一定の宗派による宗教保育には餘程の困難がある。たとへば此處にキリスト教保育の幼稚園があるとして、其處へ佛教の家庭や神道の家庭からの子供が來たとすると、其の子供は幼稚園と家庭と二つの信仰生活の板挾みになつて苦しまざるを得ない。前述の子供の疑問の第二に於ても、明かに幼稚園と家庭との信仰の不一致がある。若しも此の場合の母親がクリスチャンであつたなら、恐らくは別の答が出たであらうと思ふ。

其處で宗派によつて立つ幼稚園は、同じ宗派の者の子供だけを收容するのが最もよいのであつて、この點は幼稚園の當事者も、又其處に子供を托する親達も、十分に考へなければならぬ事である。

しかし乍ら、實際に於ては同信の者の子供だけを集めるといふ事は困難な事であるから、勢いろ〳〵な家庭からの子供を收容しなければならない。さうなると宗派の色彩の濃厚な宗教保育は避けなければならぬ。

そこで何によつて宗教保育は爲さるべきかが問題になつて來る。私の見るところでは、日本の子供には、やはり日本民族としての共通な、無意識的信仰がある。其處には日本の傳統により、日本民族の生活の間に、自然に滲み込んで居る卑俗な信仰がある。鎭守のお祭、お盆や彼岸の行事、十五夜や七夕の行事、或は四辻に立つ馬頭觀音、旗の澤山あがつて居る稻荷神社、初午の行事、七五三のお詣り、さういふやうな樣々な生活の行事から、子供が無意識の間に受けて居る影響は存外大きい。これ等はそれ〴〵宗教的な意義があつて始まつたものであつて、今日に於ては既に形式ばかりが殘つて居るとはいふものゝ、其處にはやはり宗教的な匂が殘つて居る。此の匂を嫌つて、斯ういふ生活行事の一切を迷信として斥け、家庭生活に入れない人もあるが――頑なクリスチャンなどによくさういふ人を見るが――それは決してよい事ではない。それは民族的生活の否定であるからである。

例へば、七五三のお祝ひで、七つ五つ三つに達した子供のある家では、皆晴着を着せて產土の神樣にお詣りする。子供等は大喜びである。ところが或る家ではそれをしない。どういふ信念からか知らないが、それをしない。友達は皆嬉しさうに神詣りにつれて行つて貰ふのに、その子供だけはして貰へない。その子供は寂しい氣持で居るのである。斯ういふのは考へものだと思ふ。これ等の行事は、今ではもう民族的な生活形式になつて居る。これをしも斥けるといふ事は、日本民族としての生活を斥ける事であつて、子供のために決してよい事であると思はれない。

年中行事に現れた斯うした生活形式は、既に吾々の血となり肉となつて居るものであるから、而してこれは殆どすべての日本人に共通なものであるから、斯うした卑俗な信仰生活の樣式の中から、我等の宗教保育は出發すべきであらう。此

の中から本當の信仰を育てゝ行つて、これを洗練し向上せしむるこそ本當の宗教保育であると思ふ。

五

結論として私は、日本國民のための宗教保育は日本國民としての民族性に立脚しなければならぬ事を主張する。而してこれが爲めには從來卑俗な形式と思はれて居た年中行事の如きものを生かして、其の上に眞の宗教保育が爲されて行くべきであると思ふ。

此の立場から子供の生活を中心にして、子供の宗教性を育てゝ行く保育こそ大切である。これが爲めには一宗一派に偏せざる生活保育こそ望ましいと思ふのであるが、一定の宗派に屬する幼稚園に於ても、此の精神の下に、民族性に立脚した生活指導を基礎として、其の上に宗教保育は爲されて行くべきであると思ふ。若しも斯うした子供の生活指導を忘れて、單に宗教的理想をのみ注入しようとするならば、其處に必ずや大きな破綻が起つて來るであらう。

幼兒をよき環境に憩はしめよ

砥上種樹

▲誰であつたか「七歳迄の子供を我が手にまかせよ。さすれば其の後は何人の手に渡すも氣遣ふ所がない」。と云つて居たと思ひます。

ほんとに、それ程、幼兒の教育は大切であります。でもその保育は機の發しないのに教へ込んだり作爲させたりする事ではありません。自然性の潑溂たる中に、感じさせ、學ばせる事であり、よき環境に憩はせる事であらねばなりません。それが爲めには、親、保姆、教師は、ほろ〳〵とこぼれる樣な愛と正しい希念と導く技術とを持つて共に生活を營む事に力點を持たなければなりません。

そして、子供に導かれつゝ子供を導くことによつて、幼兒の美しい芽はすく〳〵と伸びて行くのであります。譬へば、春草が大地に暖められて、むく〳〵と萌え出づる自然の惠み、偉大なる性は更に神の思召による試練、試行の機會によつて、風雨寒暑、鳥蟲のさまぐ〳〵に促進され、障碍され等して、その姿が種々に變化して行くのであります。されば、個々の天賦を毀傷することなく、さりとて、放任することなく、よき環境に影響されつゝ輔導する事が幼兒の教養上大切であります。

▲斯くて幼兒の純眞素朴な行動の中には、人間の有する本能や衝動が閃光的に表はれて來るが故に、その機を逸する事なく、よき芽を伸ばし、惡しきを昇華しようものなら三つ子の魂百迄の諺にふさはしく確と基礎を打立てることが出來るのであります。

故に優れた保姆、教師は、子供の一擧手一投足にも鋭敏に感知し、無意識的に、意識的に導くのであります。

といつて、決して急いではなりません。怠つてもいけません。子供の自然性をつかむ爲めには子供の身體を支障なく

發育させるがよい。そして、成可大自然の中に存分に呼吸させ、遊戯させ、その一切の行動を潤み、眺めて保育の素材を拾はなければならぬ。否その本能の表はれこそ唯一の保育の機緣なのであります。

▲幼兒が一度、感受し又は表現したものは、永遠に沈潛して居て、何時かは、發芽するであらうと思ふ時、不用意の中に多くを潛眠させて居ることを怖れるのであります。見よ。幼兒のまゝごと遊びを……その中には驚く程色々のものを表現して居るのに驚かされるでありませう。小學校六年の一兒童が小說を作りました。その着想とか筋は嘗て五つの時に子供芝居を見物したのがモチーブとなつて居るのであります。又、理科の時間に一兒童が魔法瓶の說明を上手にしました。それは嘗て幼稚園のころピクニックして食事の際に母親から語りきかされた事が頭に湧き出て來たのであると云ふのです。又幼年時代田舍で暮した一兒が高原の夏といふ小說をかきました。それには都會育ちの子供には到底表現し得ない田舍の情景を綴つて居ました。是によつて見ましても、潛眠させる教育？無意識の教育？、感應させる教育？何と名づけてよいか其の言葉を知らないが、兎も角も、大自然を根蔕として、人爲的にもよき環境を作つて各感官を通じて豐潤に潛眠させる事を幼兒教育に工夫したいと思ひます。

▲まゝごと遊び……このまゝごと遊びを極めて、なめらかに教育に取り入れるならば、科學の芽も、道德の芽も、藝術の芽等々、存分に伸びて遂には劣等生の名も消散するであらう事を信じます。それには、保姆や教師が全く幼兒の心にとけ込んで同じレベルになつて遊び得なければならぬ。否寧ろそのグループの氣分を釀成し得るまでになりたいものです。之れは幼稚園の保育ばかりでなく、小學校の教育に於ても、大切であり、これによつて、潑溂たる學習が形成されるのであります。

フレーベルの恩物の如きも、さうした生活態度の上に與へなければならないのであります。

▲遊戯……放つておいても、自然になされるものを益々生かしてほしいのです。砂や土いじり、穴ほり、水遊び、木登り、鬼ごつこ等は子供のたまり場で常にあかず成されて

居る處であります。又、四季の變化に伴つて產み出される石けり、繩とび又は、年長者の示唆によつて表はれる色々の遊び、或は大人の眞似や教育的に作られた遊戲、道具等によつて子供の心身が、ずん〳〵伸びて行くものであります。

▲作爲……遊戲から勞作へと期案されることは、貴いことであります。掃除、花園の手入等はそれであります。でも常に、義務觀念よりする事なく、歡んで爲し、成し得たる事を感謝することを狙つて居たいものであります。

斯くして次第に發展して參りますと、學習の域へと向上して參ります。幼兒の遊びの中に描いたり、歌つたり、語つたり、工作したりする事があり、文字に興味を持つたり、數學を歡ぶ樣になつたり致します。そこに當然的に學習の形體が創造されさうなころには、助成してやらなければなりません。

勿論、幼兒に於ては、遊びに出發した學習であらねばならない事は前に述べた通りであります。然るに往々子供の眞相を度外視して一つの細目を保守して之れに與へ、或は個別化した取扱ひをうるさがつたりすることがあつたなら、幼兒の教育の上には暗雲が漂ふのであります。

▲幼兒は寸刻もお止みなく伸びて居るが故に、絕えず、環境のさま〴〵が無意識的に將又意識的に驚異を與へつゝそれが水泡(うたかた)の樣に現はれては消えてしまふ樣でありますが、其の實、心の奧深く潛眠して居るものであります。

軈て、それが顯在的に導かれる時期の到來するものであるから、よきを潛眠させることに心掛け、その衝動するものを昇華させることに重點を置いて施設し經營する事が、幼兒教養の一大祈念であります。否これによつて幼兒はすく〳〵と伸びて行くであらう事を信じて疑はないのであります。

東京女子高等師範學校保育實習科
入學募集は一月二十日の官報にて發表せられる筈です。尙詳細は貳錢郵券封入の上、同校教務課宛お問合せ下さい。

兒童心理學文獻抄 十四

牛島義友

言語の發達

語彙の增加

乳兒期から幼兒、兒童期に亙つて示す目に見えた身體の發育に何人も驚異の眼を向けるが、それにもまさる目に見えない知識の增加に對しては人は割合に無關心であつて、子供を何も知らない幼稚な存在として過少視してゐる。

いかにも最初の誕生日の頃は彼等はまだせいぜい「ウマウマ」とか「バァ〳〵」位しか云へないが、小學校に入る頃になると三千位の言葉を聞き分ける事が出來る。此の三千といふ尨大な數は恐らく誰も信用してくれないかも知れない。此疑念には一應理由がある。いかにも普通の辭書に於てもほんの一萬五、六千から五、六萬の言葉が載せられて居る丈である。大日本國語字典は二十四萬餘の語彙を集めてあると云ふが之は恐らく口語數の最大限度であらう。併し普通に之丈の數の言葉が使用されて居る譯ではなく古今の文獻中最も多くの語彙を驅使したと云はれるシェークスピヤの著作と云へども一萬五千語を用ひて居る丈であるし、まして普通の書物は多くて五、六千で或人は二千語以內で十分日常の用を辨じ得ると云つてゐる。然るに子供は六歲にして既に三千の言葉を理解して日常の社會生活に必要な丈位の言葉數を知つてゐるといふ事はまさに奇蹟とも云ふべき現象であらう。

此の三千と云ふ數は單なる推測によつて出されたものではなく實際の調査によつて得られた數なのである。

久保良英、**幼兒の言語の發達** 兒童研究所紀要五卷

久保氏は日毎に覺えて行く愛兒の言葉を忠實に記錄して行かれたが、二歳から六迄歳の語彙の增加は次の如く六歳の時には二千三百近くの語彙を示して居る。

二歳	三歳	四歳	五歳	六歳
語數三〇〇、	八八六、	一六七五、	二〇五〇、	二二八九、

此の研究には一々の言葉も全部示されてある。

久保氏の研究は一人の兒童に就ての發達的調査であるが、二十五人の小學校新入生に就て調査した澤柳氏等の研究では、之以上の數が示されてゐる。

澤柳政太郎、田中末廣、長田新共著、**兒童語彙の研究**、大正八年

まづ辭書の中から六千八百六十七の言葉を書き拔き、印刷しておき、子供を一人々々呼んで是等の語を逐次尋ねていつた。斯る多數の數であるから無論數十回に分けて尋ねたので、その尋ね方も種々の仕方をとり、要するに子供がその語を知つて居るかどうかをたしかめて行つた。例へば「筆入とは何か」と聞いて說明させたり、「右はどちらか」と云つて擧手させたり或ひは大將から中將以下少尉迄順々に列擧させたり、或ひは物を見せてその名を云はせるといふ風な方法を用ひた。

その結果新入生の知つて居る言葉數は平均四千餘となり、久保氏の結果と多少相違するが、之は研究方法の相違に基くのであらう。

最多數	最少數	平均
五、一六二一	三、五〇〇	四、〇八九

如何なる語彙を知つてをるかを知りたい人は本書の中に詳細な結果が示されてゐる故に參照されたい。

此中には名詞が最も多く其他次の如くになつてゐる。

名詞	六十五・六%	代名詞	〇・九%
動詞	十九・二	助動詞	〇・九
副詞	六・三	感動詞	〇・七
形容詞	四・〇	接續詞	〇・五
助詞	一・八		

又語彙の內容から分類して見ると、飲食に關するものが最も多く次に道德並に心理に關するもの、身體、戰爭、動物、植物等の順となつてゐる。

意味の深化

以上の二研究によつて語彙の量的な發達を詳かにする事が出來、量の上から云へば小學校新入生はもはや一人前の言葉の理解者と云つてもよいかもしれぬ。併し此の言葉の理解即ち內容の點を考察するとそこに又著るしい變化があり、大人と子供との相違は單に言葉數の多少と云ふより言語の內容の深淺にある事を氣付いて來るであらう。

次に此の言葉の理解の狀態を例を擧げて說明してみやう。例へば筆者等が幼稚園の子供にお母さんとは何ですかと尋ねてその觀念內容を調べて見た所が次の樣な色々の答をして居る。

人間。足が生えて頭がある。お母樣はお母樣。知らない。

是等はまだ「お母さん」と云ふ言葉を知つてゐてもそれを正しく表現する事が出來ない狀態である。

御飯炊くの。御馳走作つたりする。お洗濯する。おべゝ縫つたりするの。お臺所にゐるの。

是等は母の子供に對する役割によつて說明するもので斯るものを用途定義と云ふ。少し進んだ子供は更に母と子供との關係を以て說明してゐる。

子供を育てる爲にあるの。赤ちやんを生む。子供を生むの、生まないとお母さんゐないの。

斯るものは用途以上の定義と云つて一段發達した答である。

もう一つ例を擧げる。「時計とは何ですか」の問に對して、

丸いもの。ガラス。小さいの。動くの。針。鳴る。あそこにあるの。

等の如き不完全な答をなすものが滿四歲では四十%位。五歲では三十%位ゐる。

時間を見るもの。時間を知らせる。針が動く。學校に行く時何時つて見るの。大きい人が使ふもの。お母樣の腕にはめるもの。等は用途定義であつて大部分の子供は斯る答をする。眞丸くて眞中に針があつて周りに一、二、三、と書いてある。丸くて針があつてカチカチ云ふ所もある。丸くてネヂがあつて足があつてその後の眞中に振子があつて一、二、三、と書いてある。

等の答は用途以上の詳細な敍述で一層進んだ定義である。

同じ問を中學生或は吾々成人にかけられたとしたならば其答は一層複雜となり抽象的となつて來るであらう。斯くの如く言葉の意味内容の變化及び深化に知性の發達が見られる。故にビネーは此の關係を智能檢査に應用して、五歳の子供に、机、鉛筆、火鉢、電車、馬、人形を聞き、四つ以上用途定義がなされゝば合格とし、九歳兒には飛行機、虎、學校、兵士を聞き二つ以上用途以上の定義をする事を要求してゐる。更に十三歳に於ては抽象的な言葉憐れみ、復讐、慈善、羨む、勇氣を擧げて定義をさせて居るが斯る抽象語の理解は知性が相當に發達した爲にのみ可能なのである。

以上の如く子供の言語の發達は語彙の增加と意味内容の深化によつてなされるのである。併し之丈ではまだ一人前の言葉の使ひ手とはならない。子供の言葉には多くの間違つた用法、所謂訛りがある。之が訂正されなければ大人の言葉とはならない。

誤まれる用法

教育的環境の不完全な子供程間違つた言葉遣ひをなすが、或託兒所の子供の中から拾錄された次の研究は興味のある結果を示してゐる。

城戸幡太郎、**兒童語の表現形態について**、教育心理研究卷六　昭和六年

之によると子供は色々な誤用をなして居るが、先づ言葉の訛としては次の樣な種類が擧げられる。

省略型　こな下駄(こんなと云ふ可き處)

添加型　お化けなみたいの(お化けみたいな)

轉型　花咲いてあんの(あるの)

類化型　もかしちやつた(もやしちやつた)

傳承型　かつこと行くの(活動へ行くの)

又文章の形の中にも色々な誤がある。之を分類してみる。

一、孤立文、助詞、用語が缺けて居るもの

例　こねね、でつかいの、お父ちやん(このでつかいのはお父ちやんだ)斯る種類の誤二十二個があつた。

一、無緣文　助詞はあるが不完全なもの

例　母ちやんがこゝもいたいの(母ちやんもこゝがいたいの)此誤十一個

一、亂脈文　例　あたひ田舍へ行つてて、田舍のおばあさ

んゐるよ(田舍へ行くとおばあさんがゐる)十個

一、混線文　文脈の錯綜により意味表現の混線したもの、例、たまひじやくし(お玉杓子)の手や皆んな切つちやつて、たまひじやくしになつたの(手や尾がとれて蛙になつた)九個

其他、用語の誤を述べるならば、融通型と變容型をあげる事が出來る。融通型にも色々ある。

倒語型　意味を轉倒して現したもの。例、お辨當がはいれないの(出ないの)五個

轉意型　意味の轉用せるもの。例、先生、こはれたの(先生、紙が破れた)十一個

流用型　一定の活用を他の活用に流用したもの。例、お頭洗つてゐたの(洗つたの、或は洗つてきたの)十三個

變容型の中には次の樣なものがある。

省略型　貸してまつたの(貸してもらつたの)四個

混化型　用語の活用が二種以上結合して混化するもの。例、あたい齒が悪いのないの(悪くないの)六個

類化型　活用の類化せるもの。例、先生があそこにゐた時(ゐた時)十一個

以上の他に副詞や助詞の誤り等があげられてゐるが、斯く數個の用法を混用したり、類化して勝手な子供の言葉が作られて居る。斯る誤用は素より訂正されねばならぬが、其爲には多くの經驗と教育を受けねばならない。

以上の他に國語の問題としては假名使の問題がある。之は大人でも屢〻誤つて惱まされるものであり、理論としても、歴史的假名使說と發音的假名使說が對立して居る。言語心理學の立場からは其何れを採るかの前に、先づ現今實際に多くの人々が用ひて居る假名使を調査する事が必要で、東京應用心理學會に於ては數年前から其爲の特別調査會が設けられ既に數種の業績が發表されて居る。

以上語彙の增加、意味の深化、正しい用法の三點から說明したが尙其他言葉の意味を追究して行くと、兒童の心性が明かとなり、前號に紹介したピアジェの「言語と思考」(J. Piaget The language and thought of the child 波多野氏兒童心理學)には其興味ある結果が報告されて居る。

幼年童話

踏切ごッこ

武田雪夫

1

さあ、これから、「踏切ごッこ」さいふ、面白いお話をして上げませうね。

ヒデヲ君が、幼稚園から、

「唯今！」ッて、元氣よく歸つて來ますと、お友だちが、大ぜい、遊びに來ました。

――一ばん先に、まづ、キミコさんが來ました。タケシ君も來ました。それから、ヨシコさんと、シゲヲ君が、一しょに來ました。あとから、カズコさんも來ました。

ヒデヲ君のお母さまが、出ていらしゃいました。そして、

「まあ、まあ、大ぜいのお友だちですこと。みなさん、仲よく、お遊びなさいね。今日は、こんなに、よいお天氣で、あたたかですから、お庭でお遊びなさいな」。と、おつしゃいました。

ヒデヲ君は、

「はい」。と、お返じをして、一寸考へてゐましたが、

「あゝ、さうだ、さうだ。ぢゃあ、今から、みんなで、汽車ごッこをして遊ばうよ」。といひました。

「いゝなあ」。

「うれしい、うれしい」。

「面白いわね」。

「えゝ、わたし、大すきよ」。

みんなは、よろこんで、わいわい大さわぎをしました。

2

ヒデヲ君のお家の庭は、廣い廣い庭です。――芝生もあります。木も、たくさん植はつてゐます。お池もあります。それから、小さな、富士山のやうな形のお山もあります。

そら、お山のかげから、汽車が出て來ました。ヒデヲ君が、先頭です。

「シュッ、シュッ、ポッポッ、シュッ、シュッ、ポッポッ……」。

まあ、大へんな元氣です。あゝ、ヒデヲ君が、機關車なのです。

キミコさんも、タケシ君も、ヨシ子さんも、カズコさんも、みんな乘つて居ます。シゲヲ君は、一ばん後に乘つてゐます。

シゲヲ君が、大きな聲で、

「次は、東京、東京でございます」。さいひました。ああ、シゲヲ君は、車掌さんになつてゐるのですね。

「シュッ、シュッ、ポッポッ、シュッ、シュッ、ポッポッ……」。

汽車は、山の後から、お池のそばを通りました。それから、太い木のこころを曲るこ、芝生の中へ入つて來ました。

シュシュ、ポポ、シュシュ、ポポ、シュ、ポポ、シュ、ポポ……。

おやおや、汽車は、急に早く走り出しました。さうするこ、キミコさんも、タケシ君も、乘つてゐるお客さんは、みんな、ごんごん、一しょに、早くかけ出さなければなりません。

だつて、この汽車は、お紐の汽車なのですもの。一本の長いお紐を結んで、その中へ、みんなで入つてゐるのです。

3

そこへ、誰か來ました。

「ヒデヲくーん」。

さう言つて、入つて來たのは、ヒサシ君でした。

みんなが、面白さうに、汽車ごッこをしてゐます。ヒサシ君は、すぐに、仲間に入りたくなりました。ヒサシ君は、汽車を追ひかけて行つて

「ねえ、ぼくも入れてよ。――のせて、くれたまへ」。こ、いひました。

汽車は、すぐに止りました。

けれども、汽車は、一ぱいです、もう、一人も乗られません。一人でも乗つたら、それこそ、みんな足を踏んでしまつて、こても、かけては歩けないでせう。

すると、その時、シゲヲ君が、

「そんなら、君、驛長さんになりたまへな。そこのお縁側のところが、停車場だから、そこに、立つてゐればよいよ」。といひました。

ヒサシ君は、すぐに驛長さんになつて、お縁側の前に立つてゐました。そして、汽車が近づいて來ると、胸をそらせて、ゆつくりゆつくり歩き出します。

そして、汽車が止ると、大きな聲で、

「トウキャウ、トウキャウ。どなたも、お降りを願ひます」と呼びます。けれども、誰も、一人も降りる人はありません。だつて、みんな、乘つてゐる方が、面白いからです。

4

さうすると、そこへ、また一人、お友だちが來ました。

——マサイチ君です。

マサイチ君は、

「ね、ぼくも、仲間にしてね」。といひました。さあ、困りましたね。汽車は滿員だし、驛長さんもゐるし、ほんとに困つてしまひました。たうとう、汽車も止つて、考へてゐます。そのうちに、機關車のヒデヲ君が、うまいことを思ひつきました。

ヒデヲ君は、にこにこして、

「ああ、さうだ。いいことがあるよ。君、踏切番になるといいよ」。と、マサイチ君に言ひました。

マサイチ君は、よろこんで、

「どこが、踏切なの？」と、聞きました。

「あそこだよ。ほら、木が二本ならんでゐるところさ。お玄關の方からの通り路だもの、あそこが、踏切だよ」。と、ヒデヲ君が、指さして教へました。

マサイチ君は、すぐにそこへ行つて、そばに置いてあつた、柄の長い箒をとつて、それを二本の木の枝から枝に渡して掛けました。「マサイチ君」と、ヒデヲ君が呼びました。

——「あのね。君、ハンカチ持つてゐるだろ？それを踏切の旗にしたまへ」。といひました。

すると、驛長さんのヒサシ君が、

「踏切の旗なら、白と赤と、二つなくては、をかしいよ」。と言ひ出しました。

そこへ、ヒデヲ君のお母さまが、お玄關の方から、踏切のところへ、歩いていらつしやいました。マサイチ君は、あわてました。木の枝にかけわたしてあつた幕を、はづさうとしました。もう、汽車は、すぐそばまで來てゐます。

すると、お母さまは、

「あら、そんなことしたら、あぶないわ。汽車が通つてしまつてから、お開けなさいね。をばさまは、それまで、待つてゝ上げますからね」。と、おつしゃいました。

マサイチ君は、

「ええ」。といつて、踏切を開けずに、白い旗を出して、ちゃんと立つてゐました。

ヒデヲさんたちの汽車は、踏切のところへ來ると、みんな、喜んで、わいわい大さわぎをしました。だつて、本當の踏切のやうに、ヒデヲ君のお母さまが、立つて待つていらっしゃつたからです。

シュッ、シュッ、ポッポッ、シュッ、シュッ、ポッポッ……。

汽車は、踏切を通り過ぎて、また、むかふの方へ走つて行きました。おしまひ。

さうすると、キミコさんが、ポケットから、うす赤い色のハンカチを出しました。そして、

「これでは、どう?」と言ひました。

「ああ、それは、いいね」。

マサイチ君は、よろこんで、そのハンカチを受取りました。短い竹に結びつけて、小さな赤と白の旗が二本出來ました。

汽車は、やつと、また動き出しました。

「シュッ、シュッ、ポッポッ、シュッ、シュッ、ポッポッ……」。

5

マサイチ君は、踏切のところに立つてゐました。

汽車は、早く踏切のところを通つて見たいのか、お池の方をまはらずに、すぐに、こちらへ、近づいて來ます。マサイチ君は、いそいで、旗を出しました。白い方の旗を出しました。——白い旗は、「大丈夫ですよ、お通りなさい」といふ時に出す旗です。赤い旗は、「あぶないですよ、通つてはいけない、止りなさい」といふ時に出す旗です。

汽車は、いよいよ近づいて來ます。

素人に出來る木工の話（三）

東京女高師教諭　山形寛

一　鉋の構造

鉋を使ふことは素人にはむづかしいと言ふことをよく聞きます。然しむづかしいと言つても、よく切れるやうに仕立てた鉋で、只木を削るだけのことならば、どんな素人の方にも、相當に出來ることです。尋常四年位の兒童になると鉋を使つて相當に木工が出來るやうになるのですから如何に素人だと言つても大人が出來ないと言ふ譯はありません。

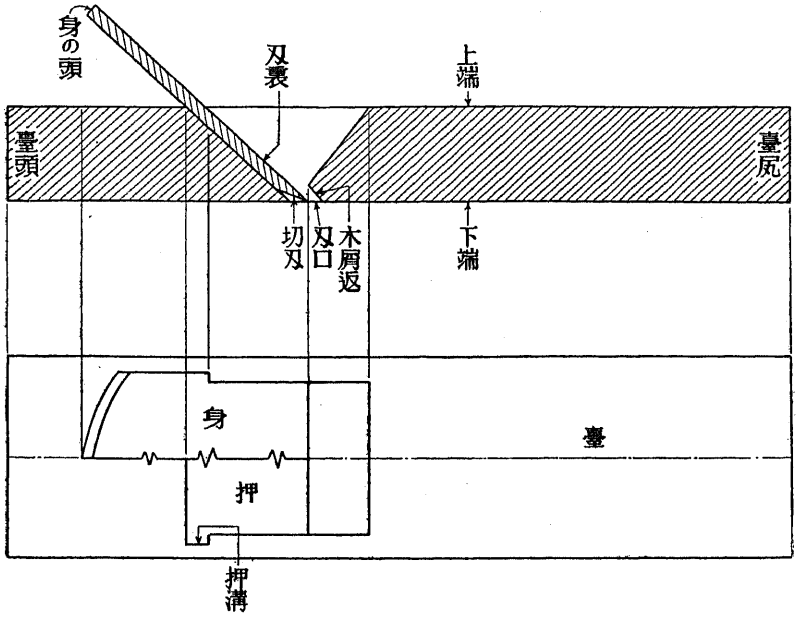
然し鉋は素人にはむづかしいとも言へるのです。それは主として切れなくなつた刃を研ぐことと、狂つた台を直ほすことにあるのです。ですからこの困難な所である刃は研ぎ屋に、台は大工か家具屋に出して手入れして貰へば、唯削ることだけなら、相當程度に素人でも出來るのです。

刃は研ぎ屋に、台は大工か家具屋にと言つても、それはどんな風になつて居ればよいかと言ふこと位は、知つて居る方が便利ですから、一通りの説明だけはして置きませう。

一口に鉋と申しましても、それには非常に澤山の種類があるのです。溝を作る鉋、物の隅を削る鉋、面（めん）をとる鉋、圓板の緣を削る鉋、丸棒や圓溝を削る鉋等々擧げれば大變澤山な種類になります。然し最も多く使はれるものは木を平に削る平鉋（ひらかんな）です。ですから唯鉋と言へばこの平鉋を意味することになるのです。

平鉋にも又四五の種類がありますが、その中でも主なものは、荒削りをするに用ふるもの、中削りに用ひて板を平坦にするもの、仕上げ削りをして削つた面に光澤を出すものゝ三者です。然しこの三者は現物を示されても素人の方

第一圖



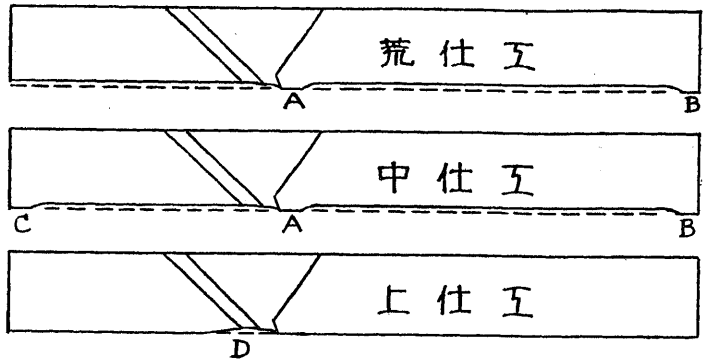
にはどこが違ふのか解らぬ位の差しか無いのです。

素人の方はこの三挺を備へる必要も無いでせうから、先づ一挺だけお持ちになればよいでせう。そして仕立方は中削りに用ひる中仕工(しこ)にするがよろしい。台を直して貰ふにも中仕工にしてくれとおつしやれば色々説明するより解りよいです。それで先づ中仕上鉋に就てどんな風になつて居ればよいかをお話いたしませう。

鉋の各部分には色々な名稱がついて居ります。その主なものは圖に示した通りですが、こんなことは一々覺える必要はありませんが説明の便宜のために書いて置きました。

鉋の台で大切な所は圖に下端(したは)とある下方の面です。中鉋に於てはこの下方の面をまつ平に削つてから第二圖の中央に示すやうにABCの三部分を除いて他の部分を半ミリ位削り落して置くのです。これは何故に削り落して落くかと言へば削る時に摩擦を減ずるためです。然し素人の方が一挺だけ使ふ場合

第二圖



には、第二圖の下にある上仕工鉋のやうにDの部分だけを削り落したものでもよいのです。

次に第一圖に刃口とある部分、即ち鉋の身の先端と木屑返(こつぱがへし)との間の隙間を一ミリ半位にして置くことです。こゝが廣くなり過ぎて三ミリもあるものはいけません。一般に大工の持つて居る鉋は刃口が廣く、細かな細工をするものゝ持つて居るものは狹くなつてゐますそれは仕事の性質から來るのです。

鉋の身はごうなつて居ればよいかと申しますと刃の裏の方は中央が幾分低くなつて居つて左右と刃の先の方との三方が同一平面になつて居ります。素人の方が鉋を研がれると、早く切れるやうにしようと思つて、先の方を丸くしてしまひますが、先が少しでも丸くなつては非常に切れないものになつてしまひます。

表の方の斜面になつて居る切刃(きれは)と稱する部分も平になつて居ることが必要です。然しこの部分は餘程上手な人が研いでも眞平にすることは困難で定規を當てゝ見れば幾分丸くなつて居るものです。然し目で見て丸くなつて居ることがすぐ解るやうでは切れません。

刃先の線は心持ち中高になつて居るがよいのですがこれとて目で見て丸いなと思ふ位丸くなつてゐてはいけません。

刃が切れるか切れないかは、削つて見ればすぐ解る譯でありますが削つて見なくとも、光に翳して見て白い線が見

えるやうになれば、その線が如何に細くても切れなくなつたのです。又刄先を指頭で刄に直角に撫でゝ見てこりこりした感じであれば切れ、滑かならば切れないのです。刄先に沿つて撫でると指先を切りますから御注意願ひます。

まだ鉋に就ては述べたいことが澤山ありますがあまり面白くもないことですからこの位にして置きます。

二　木材の性質

木材と申しましても、種類によつて性質もいろ〳〵ですが、全般に通じた極大體のことを述べて見ます。これは木工をやらない方でも常識として知つて居つてもよいことですから。

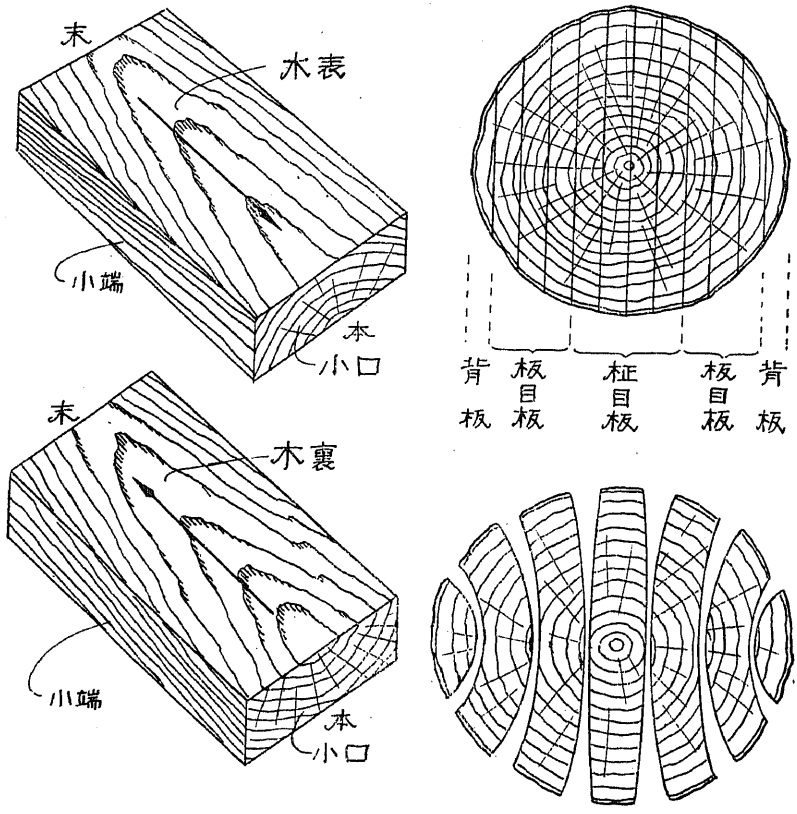
第三圖の右上にある圖は木材の斷面を示したものですが、これを線で示す如く板に挽いたとします。さうすると中央部は年輪の線が大體板に面に直角になつて居りまして、板の面には平行線狀に木理が表はれます。これを柾目の板と申しまして最も上等な部分とされて居ります。皆さんが下駄を御求めになりますにも簞笥をお求めになりますにも柾目のものは價が高いでせう、もつとも簞笥などになりますと柾目でない板でも表面に細かな筋をつけたり砥の粉で着色したりして一見柾目に見えるやうにしたものもあります。こんなのは內側を見ればすぐ解ります。

柾目の左右の板は板目板と申しまして、年輪は面に對し斜になつて居り、表面には木理が目の左方に示したやうに筍狀になつて現はれます。これは普通品です。

最左右の端にある一枚づゝは背板と申しまして、これは普通の板としては用ひられません。

木材は如何なるものでも伐つて乾かせば、收縮することは皆さん御存じでせうが、その收縮の割合は年輪に沿つた方向が最も多く、中心から放射線の方向が之に次ぎ、縱の方向には最も少いのです。ですから、木材を板に挽いて乾かせば第三圖右下にあるやうに板が反ります。然し圖でも明な如く柾目板は殆ど反らないのです。板目板はこの反つた部分を削り取つて置いても空氣中の水分をとつたり發散したりして絕えず反るものですから。かう申すとなか〳〵やつかいなものゝやうに御考へになるでせうが、やつかいはやつかいですが又この反る力を利用することもあるので

第三圖



すから、この板はどう反るかと言ふことさへ心得て居れば、物を作る上にさう苦にはならないのです。そして十分乾燥した材料を使ひ表面にワニスや漆などを塗つて外からの濕氣を受けぬやうにしてさへ置けば、やたらに反る心配もないのです。只材木屋から買つて來たばかりの木は乾燥室に入れて人工的に乾燥させるか、長時間自然乾燥させるかしなければならないのですが、乾燥室など言ふものはどこにでもあるものでは無く、自然乾燥によると、木材の性質や、挽き割つた材料の大小にもよりますが、松杉のやうな軟い木ですと三四ヶ月、堅木の丸太などは約四ヶ年位を要するのです。ですから

普通は十分乾燥したものは使へないのです。

板目の板は木の中心に近い方の面を木裏、中心に遠い面を木表と言ひますが、圖に示す如く木表の方が凹形になるやうに反るのです。木裏木表はなれて來ると面を見ても解りますが小口を見ればすぐ解ります。

お勝手の揚げ板のやうに下から濕氣の來るものは木裏を表面にし、火鉢のやうに中から火で乾かすものは木表を表面にすると よいのです。普通の器物などはどちらを表面にしてもよいのですが、木裏の方が材料が堅く又木裏を表に出した方が結合が幾分丈夫に出來ますから、普通は木裏を出します。然し木裏には節が多く木表は少く、木表の方が幾分面が滑になる傾向がありますから物によつてはその長所を生かすことも大切なのです。

第三圖の左方の上下にある圖は鉋をかける方向を示したもので木表は末の方か本の方へ木裏はその逆にかければ逆理(さかめ)が起きないのです。然し木材は纖維が曲がつて居ることが少くありませんから理窟通りに行かないことも多々あります。

木材のことはこの位にして置きます。

三　鉋の使ひ方

鉋で板を削りますにも、場合場合に應じて鉋の扱ひ方は必ずしも一樣ではありませんが、板の面を削るには、削り台の上に板をのせ、刃を僅に出して初めは鋸で挽いた目が粉狀になつて落ちる位の程度に削るのです。一般に初歩の人は刃を出し過ぎて失敗するのです。削る時の姿勢は台頭と身とに左手をかけ、右手で台尻を摑み、押へる力四分、引く力六分位の心持ちで平に引くのです。どんなに鉋の下端が平に出來てゐても、平に引かなければ平に削れるものではありません。

板の側面を削る場合には、二三枚の板を重ねて厚さ三糎位にしたものゝ上に削る板を載せ、削る部分を少し端に出し、鉋の側面を削り台の上につけて、まつすぐに引くのが最もやり易いのです。

削り方などは說明はいくら詳しくしても解りにくいものですから大膽に實際にやつたり、他人のやつて居るのを見たりして會得して下さい。

こんなことはいくら說明しても面白くありませんから、實際の製作に就て一二說明いたしませう。

四　庭園用椅子

第四圖に示しましたのは、庭園で用ひる子供用の肱掛椅子であります。これは何時だか坂田秀太郎氏がラヂオで放送されたものを少し改造したもので昨年こちらの學校の保育實習科の生徒に作らせて見たものですが皆相當に作りました。

材料は米松のやうなものでも栓なごでも結構です。丁寧に仕上げるには鉋をかけてきれいに仕上げるのですが、鋸挽のまゝのものでもよいでせう。作り方の大體をお話しませう。

先づ厚さ一センチ五ミリ位の板から左の材料をとります。

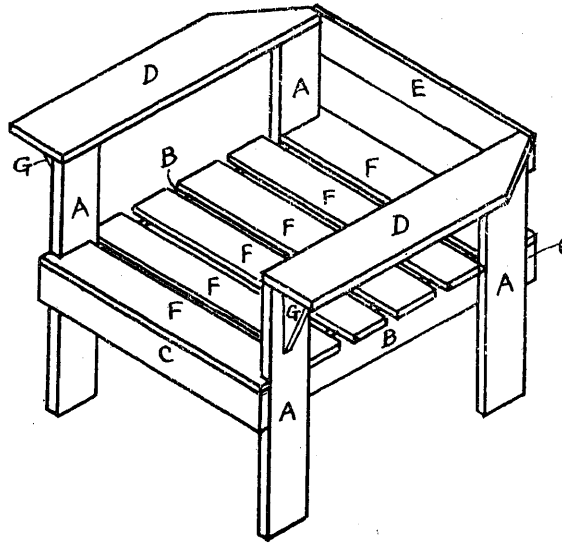
A　6cm——40cm　4本……脚
B　6cm——40cm　2本……左右の貫
C　6cm——35cm　2本……前後の貫
D　8cm——40cm　2本……肱掛
E　6cm——35cm　1本　後板

次に厚さ一センチの板で

F　6.5cm——35cm　6本　座板

G板はD板を切つた端を用ひます。

第四圖



以上の材料は總て所定の幅よりも幾分廣く鋸で挽いて、側面には鉋をかけて平にして置ます。又小口は鉋をかけることが困難ですから、丁寧に切る位置に線を畫いて置き、そこから正確に鋸で挽き切ります。

D板の一端の缺きこつた所は、隅から五センチと八センチの所に線を斜に引いてそこから鋸で挽きとります。

以上が出來ましたら、いよ〳〵組立ですが、次の順序によります。

1　脚(A)の下から二十四センチの所に一本線を引き、貫Bの上の側面が線に當るやうにし貫の兩端と脚の側面とが一致するやうにして長さ二センチ半の釘で止めH字形のもの二組を作ります。釘は一ケ所の結合に二本位用ひます。

2　次に貫Cを前後から當てゝ、長さ四センチ半位の釘で脚と貫とに止めます。釘が出ないやうに豫め錐で孔をあけて置くことが必要です。

3　次に肱掛Dを脚の上端に、長さ四センチ半位の釘で止めます。

4　後板Eを脚と肱掛とに釘附けにします。

5　支へ板Gを脚と肱掛とに釘附けにします。

6　座板(F)を貫に釘附けにします。この釘は三センチ位のものでよろしい。座板の前と後のものには、豫め脚のはまる切込をつけて置くことが必要です。

以上で組立が終つたのですが、あとは白ペンキを三度位塗つて仕上げます。

五　庭園用卓子

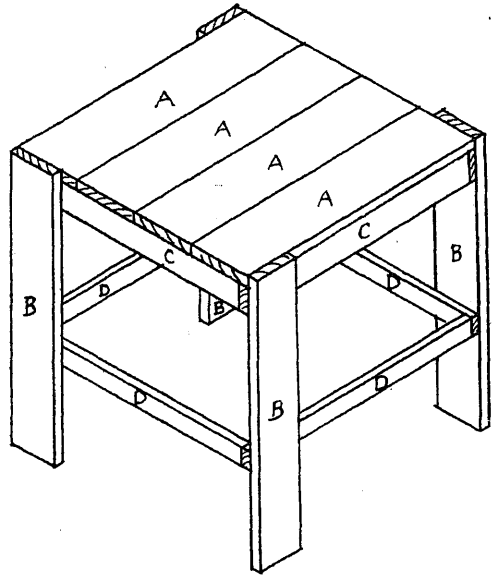
第五圖に示しましたのは、前の椅子に合せた庭園用の卓子であります。材料には椅子と同じ、米松か栓のやうなものを用ひます。作り方は次のやうにします。

先づ厚さ約一センチ五ミリの板から左の材料をとります。

A	10cm——40cm	4枚	甲板
	(これは 20 cm×40 cm 二枚にしてもよろしいです)		
B	7cm——50cm	4本	脚
C	6cm——38.5cm	4本	幕板
	(長さは 40 cm から板の厚さだけ引いた寸法です)		
D	3cm——38.5cm	4本	貫

(長さはC板同樣40cmから板の厚さだけ引いた寸法です)

第五圖



組立方は先づ甲板(A)を平にならべ、その下に幕板(C)を追廻しに當てゝ釘附けにします。

次に脚(B)を圖に示す如く追廻しに當てゝ、甲板(A)と幕板(C)とにしつかりと釘附けにします。

次に貫(D)を追廻しに釘で結合して枠のやうな形にしてから、脚の下端から二寸糎位上つた所に釘でとりつけます。

最後にペンキを塗つて仕上げます。

六 結び

以上三回に渉つて、素人に出來る木工のお話をいたしましたが、やれば誰れにでも出來ることですから一つ御試みを願ひます。自分で作つたものを自分で使ふ、こんな愉快なことはありません。あまり長くなりますからこゝらで止めにいたしませう。

各地皆樣から御年賀狀を頂き、厚く御禮申上げます。誌上御挨拶申上げます。

昭和十一年一月

倉橋惣三

お角力遊び

及川ふみ

お角力の季節になりました。幼兒にも好角家がありまし。春場所の取組みが發表になりますと、保育室の黑板に漢字で新聞紙上通りに横網から幕下に至るまで力士の名をちやんとかきならべるほどの大したものもあります。砂場でも、お部屋でも、いたるところを土俵にしてお角力をはじめます。

幼兒のお角力取りは保姆の眼のとゞくところでさせないと思はないけがなどをする事があります。お砂場でもお部屋でも、ころんでもあぶなくない土俵にして、思ふ存分お角力をさせますと酷寒の折にも汗が出るほどになります。はずかしがりの幼兒や、靜かにばかり遊んでゐる幼兒には一段と活動性を增す遊びであります。

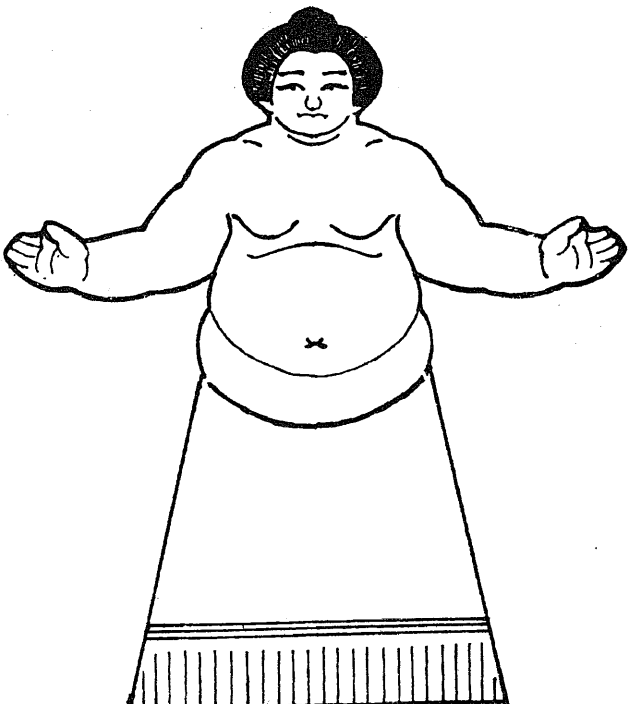
お部屋やお砂場の都合で、幼兒自身がお角力の取れない時に机上でこんなお角力遊びは如何でせう。

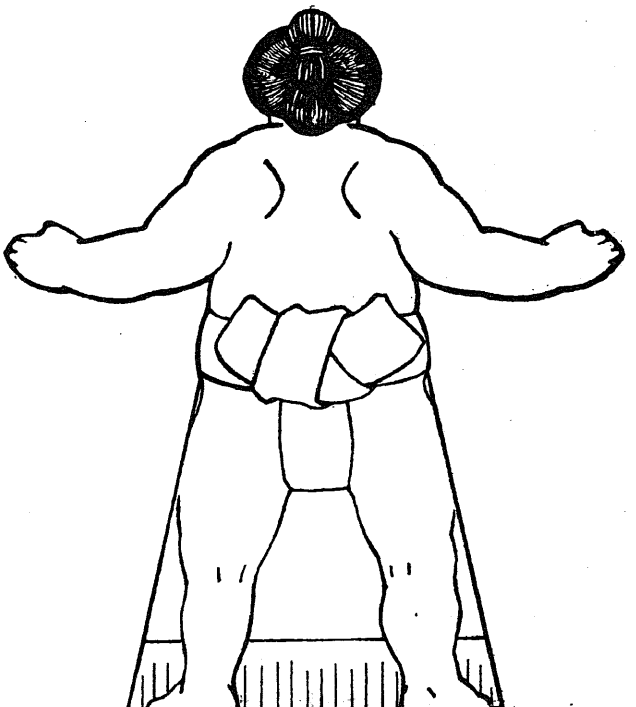
圖の樣なお角力の形をこつて化粧まわしにはそれ〴〵幼兒の御ひいきの力士の名を書き入れさせて、その輪廓を切りぬかせます。化粧まわしの房のところをきざ〳〵ときりこみ前後の二枚を上半分だけのりで、はりつけます。兩手は手のつけねから前に直角位に折り、裾は前後とも半圓にまげます。

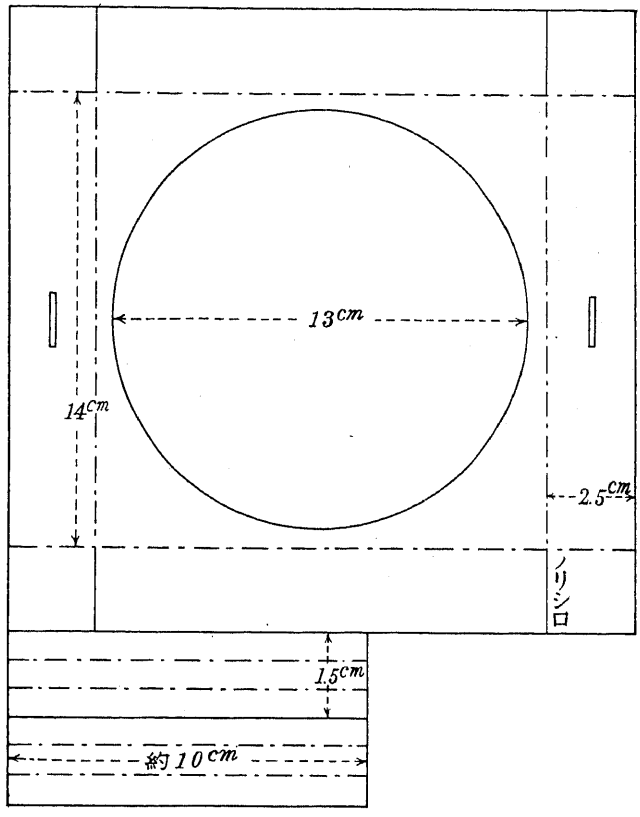
土俵

土俵は畫用紙の八ツ切に、高さ二センチ半、縱横一四センチの方形をつくります。その中に直徑一三センチの圓形をつくり、土俵とします。年長組の幼兒には、圓形の土俵の周圍には俵の圖をかゝせますと面白いと思ひます。

土俵の上にのつた二つの角力を動かす仕組みは圖の如く四角の臺の左右イロの部分にさしはさんだ先きの曲つた(半センチばかり曲げる)棒樣のもので、土俵の下からコツ







コツこつき上げて土俵を震動させるのであります。棒の長さは、十センチとして、半センチは上部の方にまげ、それよりさらに五センチ半だけ中にさしこんで、その棒が出たり入つたりしないやうに別の畫用紙でとめます。手で棒を動かす部分は四センチになるわけであります。お角力は二つとも棒のさしこんだ方向におきます。そのとき二人の幼兒ですると時にはお互の角力を臺の上にのせて兩方から二人でコトコトと動かすので倒れたり、土俵の線外に角力が出たりすると負けになるのです。このおもちやで幼兒が一人遊びをするときは一方だけからたゝいて遊べばよいのであります。

土俵の上にヒゴや麥わらなどで四本柱をたてたり、幕をはつたり、行司をつくつたり、軍配をつくつたり、それからそれといろ〳〵ここの遊びも發展させてゆく事が出來ます。

本年度保育實習科卒業者

東京女子高等師範學校保育實習科は本年三月左の二十四名の新卒業者を保育界に送り出さうとしてゐます、皆それ〴〵適當な働き場所を得て斯界の爲熱心にその職に從事し度い希望にもえてゐます。御採用を願ひます。

名	出身學校	生年月日	氏名	出身學校	生年月日
石井嘉代子	東京府立第三高女	大正六年十月二十七日	酒井　信子	東京東洋高女	大正七年一月十八日
石垣　きみ	東京女高師附屬高女	大正六年七月四日	嶋澤　良	青山學院高等女學部	大正六年五月四日
小倉　和子	東京雙葉高女	大正六年十二月二十五日	白井　雅子	東京牛込高女	大正八年一月二十五日
勝田四方子	東京府立第五高女	大正六年一月五日	瀨下三智子	東京女高師附屬高女	大正六年七月十六日
桂原　幸子	同　第三	大正六年十月二十七日	田口　信子	東京府立第一高女	大正六年七月二十三日
木藤富士子	同　同	大正六年七月三十日	田中　實枝	青山學院高等女學部	大正六年五月八日
北村百合子	同　第六	大正六年十一月五日	辻　由	滋賀縣立彦根高女	大正六年六月十七日
小島　睦美	淀橋精華高女	大正七年一月二日	富永　文代	東京府立高等家政	大正七年九月十六日
佐久間フミ	府立第一高女	大正六年十一月十四日	西出　和子	石川縣立金澤第一高女	大正六年四月二十六日
佐藤　啓子	東京女高師附屬高女	大正六年八月十六日	村岡　禎子	東京東洋高女	大正五年五月十二日
佐藤　久子	福岡縣立喜多方高女	大正七年七月十八日	山崎喜代子	東京三輪田高女	大正七年一月九日
坂田美英子	釜山公立高女	大正六年十月十五日	吉澤　光子	長野縣立須坂高女	大正六年十月十四日

日本幼稚園協會編輯　幼兒の教育

會長　東京女子高等師範學校長　下村壽一

主幹　東京女子高等師範學校教授　附屬幼稚園主事　倉橋惣三

日本幼稚園協會規則

第一條　本會ハ幼兒教育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス

第二條　本會ハ日本幼稚園協會ト稱ス

第三條　會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒教育ニ篤志ナルモノトス

第四條　會員ハ會費トシテ一ケ月金參拾五錢ヲ醵出スヘシ、會員ハ無料ニテ本會發行雜誌ノ配布ヲ受ケ又本會ノ事業ニ關シ諸種ノ便宜ヲ受ク

第五條　令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルトキハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルヘシ

第六條　幼稚園ニ關係アルモノニシテ本會ノ事業ノ爲ニ特ニ盡力ヲ與ヘラルヽモノニ請ヒテ地方委員トナスコトアルヘシ

第七條　本會ハ毎年一回總會ヲ開ク。但場合ニヨリ臨時休會スルコトヲ得

第八條　本會ハ左ノ事業ヲ行フ

一、幼兒教育ニ關スル研究及ヒ調査

一、幼兒教育ニ關スル講演會及ヒ講習會ノ開催

一、雜誌發行（毎月一回）

一、幼兒教育ニ關スル圖書刊行

一、保姆就職及招聘ニ關スル仲介

一、其他本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件

第九條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會長　一名　會務ヲ總理ス

主幹　一名　會長ヲ補佐シテ會務ヲ掌理ス

幹事　若干名　會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス

評議員　若干名　重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ス

第十條　會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス

第十一條　主幹、幹事、評議員ハ二ケ年ヲ期シテ會長ヨリ推擧スルモノトス

第十二條　本會ハ必要ニ應シ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ル、コトアルヘシ

第十三條　本規則ハ總會出席會員ノ三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラサレハ變更スルコトヲ得ス

定價

一ケ月分　金參拾五錢
一冊送料　壹錢

半ケ年分　金貳圓拾錢
六冊送料　共

一ケ年　金四圓貳拾錢
拾貳冊送料　共

（外國行郵稅は一部金拾貳錢の割にて御拂込下さい）

昭和十一年一月十三日印刷納本
昭和十一年一月十五日發行

幼兒の教育　第三十六卷　第一號

東京女子高等師範學校附屬幼稚園內
編輯兼發行者　倉橋惣三
東京市本郷區駒込林町百七十二番地
印刷者　柴山則・常
東京市本郷區駒込林町百七十二番地
印刷所　合資會社　杏林舍
東京市小石川區大塚町三十五
東京女子高等師範學校附屬幼稚園內
發行所　日本幼稚園協會
振替口座東京一七二六六番

不許複製
禁轉載

廣告

特等面一頁　二等面一頁
金貳拾圓　金拾圓

一等面一頁　一頁以下
金拾五圓　御斷

神田區駿河臺ノ三品田廣告社に御申込下さい

注文規定

一、本誌御注文の方は凡て前金（郵稅共）で願ひます。（郵券代用の場合には總て一割增）

一、御送金の場合はなるべく振替貯金で振替口座東京一七二六六番日本幼稚園協會宛に願ひます。

一、送金の節には第何卷第何月號より第何月號迄と明記せられたし。

一、本誌の代金に對しては別に領收證を差出しません。特に御入用の方は往復はがきで御申越を願ひます。

一、會費切又は前金切の際にはその最終發送の雜誌の帶封に「前金切」の印章を押捺いたしますから其節は早速御送金を願ひます。

一、本誌の見本御入用の場合には前金參拾五錢發送を願ひます。

東洋圖書の幼稚園名書

【好評七版】

東京女高師教授
附屬幼稚園主事
倉橋惣三先生著

幼稚園 保育法眞諦

四六判美本
口繪多數入
價二圓五十錢
送料十六錢

▲保育界畫伯の力作
著者は幼兒教育並に家庭教育の第一人者として夙に長くも此点に御關心深き兩陛下の御前講演に浴されし人格者である。

▲現代の保育法原論
本書は現代に於ける最も完備し且系統ある保育原論である。寫眞多數入懇說。

三版
東京女高師教授
倉橋惣三先生
新庄よしこ先生
共著
日本幼稚園史
菊四百頁
價三、八〇
送〇、一八

十七版
奈良女高師教授
附屬幼稚園主事
森川正雄先生著
幼稚園の理論及び實際
菊三百頁
價三、〇〇
送〇、一八

六版
奈良女高師教授
附屬幼稚園主事
森川正雄先生著
幼稚園の經營
四六四百頁
價二、八〇
送〇、一六

二版
東京女高師教授
附屬小學校主事
堀ト藏先生著
幼稚園保育の諸問題
四六判四百頁
價二、八〇
送〇、一六

八版
奈良女高師教授
附屬幼稚園主事
森川正雄先生著
保姆用教育學
菊判三百頁
價二、八〇
送〇、一六

六版
奈良女高師教授
附屬幼稚園主事
森川正雄先生著
託兒所育兒法
菊判三百頁
價二、〇〇
送〇、一二

三版
倉橋惣三先生序
內山憲堂先生著
幼兒童話の話方と實例
價二、八〇

最新刊
東京女高師教授
横井曹一先生著
手技資料と其扱法
價二、八〇

五版
大阪家なき幼稚園長
橋詰良一先生著
家なき幼稚園の主張と實際
價二、五〇

七版
久留島武彥先生著
久留島名話集
價二、八〇

五版
東京音樂學校教授
高折宮次先生著
ピアノ新教本
價一、九〇

最新刊
東京音樂學校教授
篠俊雄
草川宣雄先生著
オルガン新教本
價一、六〇

發兌 東洋圖書株式合資會社
東京 東京市神田區神保町一丁目六番地七 ・ 振替東京一〇三七番
大阪 大阪市南區內安堂寺町一丁目二八番地 ・ 振替大阪三九五五六番

昭和四年五月十五日第三種郵便物認可
（毎月一回十五日發行）
昭和十一年一月十三日印刷納本
昭和十一年一月十五日發行

二月末日御注意

お子樣が歡ぶ

手技用品及表簿類

◇繪馬額——厚紙で作つた繪馬額、クレオン貼紙等でお子樣御自身がいろ〳〵意匠する大歡迎の手技材料。五十枚　金壹圓

◇屏風——雛祭又はお人形遊び用、金屏風の華麗なもの、これに貼紙の櫻その他を以て見事な意匠ができます。五十枚　金壹圓五拾錢

◇菱形——赤白草三色の菱餅を重ねたやうなチリメン摺紙で雛を拵つて飾ります。厚紙臺紙に、菱形五十枚　金壹圓五拾錢

◇摺紙（大 15cm×15cm　小 12cm×12cm）
一〇〇枚包一把　三十錢
一〇〇枚包一把　五十錢

◇保育證書——厚い堅緻な上質紙に文字を墨、周圍輪廓は壯麗な金刷、典雅な圖案による色刷により一號二號の別があります。御園名入のものは二月末日迄に御註文、無名ならば何枚にても即時お間に合ひます。

一〇〇枚園名入　金四圓
五〇枚園名入　金貳圓五拾錢
無名一枚　金五錢
金壹圓

◇出席簿用紙——一〇〇枚　金壹圓貳拾錢
◇豫定案日誌——一冊（一年分）　金壹圓四拾錢
◇在籍簿用紙——一〇〇枚　金拾錢
◇出席カード——（一人一枚一組十二年分）
◇月謝袋——一〇〇枚　金壹圓四拾錢

株式會社　フレーベル館
本店　東京・神田・神保町二ノ四・電話九段(33)三八二七番
出張所　大阪・東區・備後町五・電話本町一九三八番

定價三十五錢